

# 純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part XV



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

# 目 次

1. 「RYLA・その理論と実践」その12	2
2. 「RYLA・その理論と実践」その13	3
3. 「RYLA・その理論と実践」その14	4
4. 「RYLA・その理論と実践」その15	5
5. 「青少年奉仕」その1	6
6. 「青少年奉仕」その2	7
7. 「青少年奉仕」その3	8
8. 「青少年奉仕」その4	9
9. 「青少年奉仕」その5	10
10. 「青少年奉仕」その6	11
11. 「青少年奉仕」その7	12
12. 「青少年奉仕」その8	13
13. 「青少年奉仕」その9	14
14. 「青少年奉仕」その10	15
15. 「青少年奉仕」その11	16
16. 「青少年奉仕」その12	17
17. 「国際ロータリーとロータリークラブ」その1	18
18. 「国際ロータリーとロータリークラブ」その2	19
19. 「国際ロータリーとロータリークラブ」その3	20
20. 「国際ロータリーとロータリークラブ」その4	21
21. 「日本ロータリーの昔話」その1	22
22. 「日本ロータリーの昔話」その2	23
23. 「日本ロータリーの昔話」その3	24
24. 「日本ロータリーの昔話」その4	25
25. 「日本ロータリーの昔話」その5	26
26. 「日本ロータリーの昔話」その6	27
27. 「日本ロータリーの昔話」その7	28
28. 「今井鎮雄先生を偲ぶ」RYLA advanced course 余島	29
29. 「リーダーの中のリーダーとは」RYLA学友会卓話	40

## 序にかえて

竹中秀夫会員の発案で始まりました3分間情報『純ちゃんのコーナー』は、既に満15年の歳月を閲することになりました。歲月人を待たず、将に光陰矢の如し、あつという間の1年間でありました。

顧みて、私は、ロータリアンになって以来40数年に亘って、中央大学法学部の名誉教授小堀健助先生からロータリーの理論探求について深い薫陶を受けました。小堀健助先生は、ロータリーにおける私の恩師でありまして、今日、曲がりなりにもロータリー思想の理論構造を理解することが出来るようになりましたことも、偏に先生の温かい御教導の賜であり、先生の学恩に心から感謝している次第であります。

また、元国際ロータリー理事故今井鎮雄先生は、ロータリーにおける私の恩師の一人ですが、先生には、青少年奉仕の分野において、特に、RYLA、即ち「青少年指導者養成計画」について38年間に亘って親しく懇切丁寧な御指導を賜った次第であります。そこで、今井先生への追憶と感謝の心を籠めて、巻末に、今井鎮雄先生を偲ぶ文章を載せることに致しました。

また、東京東クラブの故佐藤千壽バスターガバナーも私にとって恩師の一人であります。佐藤氏には、実業家としての立場から、特に職業奉仕及び職業倫理について懇切丁寧な御指導を頂きました。なお、佐藤バスターガバナーは、美術の世界においても蘊奥を究めた人であり、人生万般に亘って貴重な御意見を賜りました。

更に、神戸クラブの故直木太一郎バスターガバナー、西宮クラブの執行孝胤バスターガバナーはじめ諸先輩からも心温まる御指導を賜り、真に感謝の極みであります。

さて、この一年を顧みて、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を27回に亘って話しています。しかし、若干少ないように思いますので、今回は、それに加えて、昨年9月19日に余島のRYLA委員会で話しました「今井鎮雄先生を偲ぶ」という追悼文と、今年1月16日に須磨寺でRYLAの学友達に話しました「リーダーの中のリーダーとは」という文章を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが、御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この1年間、辛抱強く私の話を聴いて下さったクラブの皆様方の友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレットの発刊に御尽力下さいました岩井秀樹会員はじめクラブ事務局の皆様にも心からなる感謝を捧げ筆を擱きます。

秋天に人々にただ謝するのみ 高野素十

## 1. 「RYLA・その理論と実践」 その12

当地区のRYLAが行われる余島の小高い山の頂に、カウンスル・リングと呼ばれる儀式の火を焚く所があります。第1回のRYLAの時も、ここでキャンプファイヤーが焚かれたのでありますが、折悪しくその時は暴風が吹き荒れていました。後で解ったことではありますが、この日、全国で死者行方不明15名、負傷者169名という被害がありました。

何故、そのような暴風の中でキャンプファイヤーを焚いたのか。

山の頂は特に風当たりが強かったので、キャンプファイヤーは風裏になる浜辺で焚くことも出来ました。また、食堂の中で焚くことも出来たのであります。

しかし、今井先生は、RYLAのディーンとして、敢えてこのカウンスル・リングで焚くことを決断されたのであります。それは一体何故か。今井先生は、『儀式の火を焚くというカウンスル・リングを持つる青少年団体は少ないので、一つのシンボルとしてここを皆に見て貰いたい。暴風の中だからキャンプファイヤーの演出としては失敗するかも知れない。しかし、その中に或る種の意図というものを学んで頂ければ結構だ。』と言っておられました。

受講生にリーダーの心というものを感じ取って貰うために、敢えて暴風の中でキャンプファイヤーを焚くことを決断されたわけであります。

今井先生は、若者達とキャンプファイヤーを囲みながら、真に感動的な話をされました。キャンプファイヤーが終りに近づいて、ドボルザークの「新世界」のハミングが終わったとき、今井先生が若者達とフレンド

シップサークルを組み、ほのかな火の明かりに照らされながら、このRYLAのディーンとして、静かに若者達を諭された言葉は、非常に印象的でありました。即ち、『キャンプファイヤーの間、私達をあかあかと照らし、温かさを与えてくれた火もようやく消えかかっています。私達は、この薪を通して三つのことを学びました。

第1は、薪は一本では燃えないということ。最初に、薪が組みたてられたように、それぞれが協力していなければ、火はあかあかと燃えないのです。

第2は、その薪は、今、燃え尽きて、すっかり崩れ落ちてしまっています。私達に光を与え、熱を与えてくれたために、一本一本の薪は、灰になってしまっています。世の中に光りを与える奉仕は、それなりの時間と労力とその他の良いものを犠牲にしなければならないのです。

第3に、この決意と協同があっても、運んできたトーチによって火がつけられたように、一つの目的が明確でなければなりません。ここに来て、ロータリーの火がつけられ、諸君の奉仕の心と共同の作業がある時、キャンプファイヤーのように周囲をあかあかと照らすことが出来るのです。』と。

私達の心に強く残った真に感動的な話でありました。

## 2. 「RYLA・その理論と実践」 その13

今日は、RYLAの話の視点を少し変えます。

「昨夜三更月到窓」昨夜、三更、月窓に到る、という言葉があります。どういう意味かと申しますと、昨夜12時頃、月が自分の部屋の窓に来てくれていた、と謂うのであります。

これは、昔、中国の南泉禪師が弟子の趙州禪師に語った言葉であります。真夜中にふと目が覚めると、月が自分の部屋を照らしてくれていました。便所に行こうとすれば、廊下も照らしてくれます。実に有り難い月の好意であります。

もし、真夜中に目が覚めなかったら、この月の優しい好意に気がつかなかったでしょう。もし、気がついても月に感謝する人はいないかも知れません。

また、気がつく人がいなくても、感謝する人がいなくても、月は秘かに優しい光を全ての人に与えてくれています。しかし、月は人から何らの報酬を求めようとはしません。これは、月だけではありません。太陽も、草木も、水も、森羅万象全て私達の命の恩人でありながら、一切報酬を求めないのであります。ロータリーの奉仕もこのようにありたいものであります。

日本の初代ガバナー米山梅吉先生のように、「ロータリーは、隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある」と言って、苦学生に学費を毎月援助しながらも、そのことを一切口にされなかったのであります。将に先生は "Service, Not self" 自己犠牲の奉仕の世界に生きた人でありました。このように致しまして、この世のありとあらゆるものが、そのあるがままの姿

で私達の生命の恩人であります。そのままの姿で仏の性を現し、神の愛を示しているのであります。これを仏教では「山川草木悉有仏性」山川草木悉く仏性有り、と謂うのであります。

実は、この言葉はロータリーの根底に流れる思想を表しています。即ち、ロータリーの奉仕の一つの在り方は、何ものをも求めず、ひたすら未来のために種を蒔くことであります。

ロータリーの役割は、結果を求めず、ただひたすらに種を播くことであります。その結果、例えば、RYLAで撒いた種が若者達の心に何時か芽生えるかも知れない。それはすぐ芽生えるかも知れない。或いは1ヶ月後に芽生えるかも知れない。1年後かも知れない。10年後かも知れない。或いは永久に芽生えないかも知れない。しかし、例え芽が出なくても、ただひたすらに種を蒔く。そして、未来に夢を託す、これがロータリーの役割であります。私は、このことを37年前の第1回RYLAの記録書に書き留めております。

このように、ロータリーは未来を夢見る思想であります。したがって、ロータリアンは理想主義者であるべきであります。ロータリーの理想主義は、只ひたすらに種を播く、そしてロータリーをShareするのであります。

### 3. 「RYLA・その理論と実践」 その14

前回は、ロータリーは、未来を夢見る思想であり、ロータリーの理想主義は、何ものをも求めず、ただ、ひたすらに未来のために種を蒔くことである、と申しました。そこで、今日は大牟田北クラブの佐古亮尊先生の話を紹介しておきます。

ジョナサン・チャップマンという人は、林檎の木をこよなく愛し、1人で林檎の種を死ぬまで蒔き続けたのであります。

コーヒーを入れるズックの袋の口から顔を出し、四つの穴を開けてそこから二本の手と足を出すという袋のお化けのような格好で、頭には鍋をかぶり、裸足で50年、山や野を歩き回りました。

サイダー工場で汁を搾った残り糟の林檎をもらい受け、一つ一つの皮を剥き、その種をほじくり出し、それを自分の着ている服よりも遙かに上等な鹿皮の袋に入れて、オハイオ州の田舎から、自分の足の及ぶ限りの土地にその種を蒔いて行ったのであります。

オハイオ州の上流のインディアンの住む部落にも、野獣の潜む森影にも、彼の林檎の種は蒔かれました。そして、疲れるとゴロリと横になり、朝は小鳥よりも早く起き、仕事を始めていました。

何時知らず、彼は「林檎おじさん」と呼ばれて、白人にも、インディアンにも親しまれました。彼は、芽が出て育ってゆく林檎の木々を見回り、人々にその育て方を教え、更に新しく種を蒔くところを探して忙しく働きました。

夜は、それらの人達の炉端に座って神様の話をし、自分の聖書の何ページかを裂い

て人々に渡しました。人里離れた開拓地の人達にとって、この何ページかの聖書は、どんなにか慰めの力になったことか。

50年の間、誰に頼まれたのでもなく、ひたすら林檎のない土地に林檎の種を蒔き続けました。にも拘わらず、何故、ジョナサン・チャップマンが林檎を植えたのか、ということを知りませんでした。

彼のこの長年の功績に対して、勲章もなければ、銅像もありません。更に墓もありません。だだ、毎年、春になると、アメリカの田舎に薄紅の花が霞のように匂い、秋に真赤な林檎の実が珠玉のように実るだけであります。

『たとえ明日が世界の最後の日であっても、私は林檎の木を植える』

これは、マルティン・ルターの言葉であります。この言葉は、ロータリーの思想やRYLAの思想と共通の境地にある言葉であると思います。

林檎の種を蒔き続けたジョナサン・チャップマンのように、RYLAで撒いた種が若者達の心に何時か芽生えるかも知れない。それは、すぐ芽生えるかも知れない。或いは1年後かも知れない。或いは10年後かも知れない。或いは永久に芽生えないかも知れない。しかし、例え芽が出なくても、ただ、ひたすらに種を蒔く。そして、未来に夢を託す、これがRYLAの思想なのであります。

## 4. 「RYLA・その理論と実践」 その15

今日は、RYLAの独自のプログラムである「思索の時間」について話します。この時間を設けた趣旨は一体何か。

実は、第1回のRYLAの終わった後の反省会で、カウンセラーをしていた姫路YMCA総主事の篠原さんが、自分のキャビンでは、「瞑想の時間」というものを持ったと報告されました。私は、これは、素晴らしい発想だと思いました。

ただ、私は、単なる瞑想というのでは少し物足りないとも思いました。そこで、1923年の国際ロータリー会長ガイ・ガンディカー Guy Gundakor が、その著「ロータリー通解」において「ロータリアンは、思索する人でなければならない。」ということを書いていましたので、これは単なる瞑想に止まらず、もっと突っ込んで思索を深めるべきものでなければならないと考えたわけでありました。

実は、戦前の日本の高等教育は、先ず、旧制高等学校では、入学から卒業までの3年間は、専ら語学と哲学その他の教養科目だけを徹底的に教育します。そして、大学の3年間では、それぞれの専門科目を教えるという制度でありました。

これは、東京東クラブの故佐藤千壽パストガバナーから聞いた話ですが、佐藤さんは、仙台の旧制第二高等学校に入学したとき、校長が入学式で新入学生全員に親鸞上人の「歎異抄」を配って、これを読むことを勧めたと謂います。

これは一体何を意味するか、と云いますと、高等学校の3年間は、人間とは何か、ということ徹底的に思索させる知的修練を目的としているのでありますが、この哲

学的な思索の基礎があって、はじめてそれに続く大学の3年間の専門的な教育が人間形成に大きな効果を発揮することになるのであります。

実際、戦前の学生は、人間とは何か、を問う哲学的な思索の修練が出来ていました。しかし、戦後の教育は、今井鎮雄先生が第1回のRYLAでも説いて居られたように、技術教育一辺倒になり、したがって、出版される本も、哲学的なものは、非常に少なくなり、どのようにすれば良い学校に行けるか、どのようにすれば出世できるか、どのようにすれば金が儲かるか、などというハウ・ツーものが殆どであります。これでは、立派な人を育てることは出来ません。

これと同じように、リーダーの教育についても、先ず、リーダーの心を作らなければなりません、そのためには、リーダーは思索する人でなければならない、と思うのであります。したがって、或る時は世俗の情報を一切遮断して専ら思索することが必要なのであります。この点、RYLAの四日間は、新聞もラジオもテレビもない世界でありますから、情報の遮断には最も適した環境であります。

そこで、せめて「思索の時間」の1時間だけは、世俗の憂きことも楽しいことも一切を忘れて、「ひたすら思索に耽る。そして、自分を見詰めること」が大切であり、そのことによって、初めて立派なリーダーが育つと思うのであります。これが、「思索の時間」を設けた本来の趣旨であります。

## 5. 「青少年奉仕」 その1

今日からは、青少年奉仕について、若干私見を申し述べたいと思います。

今、青少年奉仕の分野では、インターアクト、ローターアクト、RYLAその他諸々の実践プログラムが開発され、実践されていますが、今から約40年ほど前には、ロータリーの青少年奉仕は、未だ歴史が浅く、最大の未完成物語であり、しかも、ロータリーの弱点でもある、という意見もあったのであります。

しかし、青少年奉仕の歴史は、決して浅いものではなく、殆ど初期ロータリーにまで遡ることが出来ます。即ち、シカゴロータリークラブの人達が世のため人のための奉仕を考え始めた時に、最も素朴な考え方として、困っている人を助けようということを考えました。例えば、シカゴの街角で新聞が一枚も売れないで困っている新聞売り子の少年をクラブへ連れてきて、皆で新聞を買ってやったという物語だとか、1911年頃には、その当時、全米に澎湃として起こっていた民間の善意の運動である『身体障害児のための養護学校を設立する運動』に参加した物語などが残っているのであります。

また、初期ロータリーがボーイスカウトの育成やユースホステルの支援、そのほか奨学金制度の創設などの奉仕活動もしていたという事実もあります。

ただ、奨学金制度は、財源に限度があるため、当然のことながら、全ての子供に奨学金を与えることが出来ません。したがって、奨学金を与えられない子供が出来ます。即ち、峻別の論理が働きます。そこで、これは可愛そうだということで、色々と試行錯

誤をした結果、職業訓練所とか学校を建てるとかして、出来るだけ多くの子供が潤えるような方向、即ち、人を育てる方向に変わって行ったという事実もあります。

このように青少年奉仕の歴史は、決して浅いものではなく、初期ロータリーにまで遡ることができるのであります。

次に、ロータリーの青少年奉仕は、ロータリー最大の未完成物語であり、且つ、ロータリーの弱点でもある、という考え方があります。実は、この指摘は正鵠を射ているかも知れないと思うのであります。

何故かと言いますと、ロータリアンと青少年とでは、年齢差がありますから、価値観も人生観も違います。したがって、ロータリアンが青少年と対応する時には、寧ろロータリアンの方に戸惑いがあるのではないかと、思われるからであります。これは、青少年奉仕の実践に際して、是非とも留意すべき点であります。

実は、私達ロータリアンも昔は青少年でありましたから、若い時にどのような体験をして、どのような価値観や人生観を持っていたかということは判っています。しかし、今の若者達は、未だ、私達と同じような十分な体験をしていませんから、価値観も人生観も違うのであります。したがって、寧ろ若者達と対応するロータリアンの側に戸惑いがあるのではないかと、思うのであります。



## 6. 「青少年奉仕」 その2

前回は、ロータリアンと青少年とは、価値観も人生観も違うために、若者達と対応するロータリアンの方に戸惑いがあるのではないか、という話をしました。

一般的に謂って、元来、人間は、若い時には、何事も努力すれば獲得できる、という人生観を持っています。例えば、一生懸命努力すれば、大学にも行ける、就職もできる、結婚もできる、家を建てることもできる、全てのことは、努力をすれば獲得できる、ということを信ずることができた世代であります。

しかし、論語に「四十にして惑わず、五十にして天命を知る。」と謂う言葉がありますが、人間は四十歳を越えますと、今度は、どんなに努力しても、全てのものをポロポロと失って行く世代に入っていきます。

先ず、体力を失います。若い時に身に付けた筋肉は衰えます。歯が抜ける、目は老眼になる、髪は抜けて行く、白髪になる、健康も損ねる、そして、一生懸命に育てた子供は結婚して離れて行く、友人も死んでいく、やがて定年で職を失う、という具合に、どんなに努力しても、全てのものをポロポロと失って行く世代に入ります。この気持は、若者達には、体験がありませんから絶対に判りません。

しかし、私達ロータリアンには、年老いて失ったからこそ見えてくる、新しい智慧の世界があります。この故に、失ったからこそ見えてくる素晴らしい世界があると信じて、敢えてその世界に飛び込んで行った人達もいます。例えば、西行法師、良寛和尚、俳句の松尾芭蕉であります。この故に、日本には、昔から『老』というものを尊ん

だ文化があった筈であります。したがって、『老』という字を尊敬の意味で使っておりました。例えば、『老成』『老練』『老熟』であります。私達は、やがてこの世を去るその前に、年をとって失ったからこそ見えてくる新しい世界、失ったからこそ身につけた素晴らしい智慧を青少年に伝えておかなければなりません。これが、青少年奉仕の核心にある考え方であると思います。

では、具体的には、一体、何をどのようにして伝えればよいのか、ということが問題であります。

そこで、私達が若者達と話し合うときに留意すべきことは、お互いに人生観・価値観が違いますから、こちらの価値観を押しつけると相手は反発します。かと言って、相手の価値観に迎合すると、今度は見縊って来ます。この辺のところが難しいのであります。したがって、若者達と話し合う時には、ロータリアンの方がその対応の仕方について頭の整理をしておかなければなりません。そうでなければ、徒に反発だけを買うことになるか、或いは面従腹背で馬鹿にされてしまうことにもなりかねません。

そこで最も肝要なことは、ロータリアン自身が、或る時代にだけ通用するような価値観ではなく、現象に惑わされずに本質を見るときか、世界的な視野を持って先を見るという態度で話し合うことが肝要であろうかと思うのであります。

## 7. 「青少年奉仕」 その3

前回は、私達ロータリアンが若者達と話合う時に肝要なこととは、或る時代にだけ通用するような価値観ではなく、物事の本質を見るとか、世界的視野で先を見る、という態度で話し合うことが肝要であるという話を致しました。

では、それは、具体的には、一体、どういうことなのか、と申しますと、色々な場合が考えられますが、例えば、私達が今生きている地域社会のこともあります。ご承知の通り、私達も昔は青少年でありました。そして今、年老いて、やがてこの世を去りますが、その後に、今の青少年達が老人になり、更に、その老人の後にまた新しい青少年達が続いて行くわけでありました。このような順送りは、地域社会の中で行われます。したがって、私達は、地域社会との関わり合いにおいて青少年奉仕を考えなければならぬと思うのであります。

ところで、地域社会のことをコミュニティ (community) と謂っていますが、コミュニティとは一体如何なるものなのか、ということをお先ず考えてみますと、ドイツのテンニースという学者が、コミュニティ (community) とソサイアティ (society) について論じていますが、ごく大雑把に謂いますと、ソサイアティというのは、利益を追求することが一つの要素になっている社会のことではあります。コミュニティというのは、金銭などでは計り知れないほど価値のあるものを追求する社会のことである、と謂うことが出来ると思います。この二つの言葉は、日本語に翻訳すると、同じく「社会」ではありますが、言葉の中身が異なるのでありまして、ロー

タリーで社会奉仕を論ずるときは、地域社会、即ち、コミュニティ community のことを意味するのであります。

そこで、コミュニティは、金銭などでは計り知れないほど価値のあるものを追求していく社会であると考えれば、青少年奉仕の分野でコミュニティに奉仕するためには、一体何が肝要なことなのか。

先ず、第一に考えておかなければならないことは、青少年奉仕というもの、青少年をコミュニティの中からお預かりするわけでありまして、絶対に事故を起こしてはならない、ということでありました。

最近、国際ロータリーは、危機管理に関して、青少年奉仕のプログラムを実践するときには、多額の賠償保険をかけるように指導していますが、事は金銭などで決着のつく問題ではありません。万一事故が起きてしまつて、多額の保険金が支払われたとしても、掛け替えのない青少年の命が失なわれた損失は、金銭などでは償い得ないものなのであります。保険などと謂うものは、次善の策にすぎないものでありまして、万が一にも事故が起きないように万全の注意が必要であります。青少年奉仕を実践するときには、瞬時もこの事を忘れてはならないと思うのであります。私は、長年、RYLAに携わって来ましたが、何時も、帰宅してから、事故の連絡がなかったことにホッと安堵したものであります。

## 8. 「青少年奉仕」 その4

前回は、コミュニティというのは、金銭等では計ることが出来ないほど価値のあるものを追求していく社会である、ということをお話しました。

ところで、コミュニティは、目に見える現象としては年々歳々変動して行きます。殊に、人口構成の変動が顕著であります。入れ替わり立ち代わり、人間が老いて亡くなり、生まれて老いる、この繰り返しのうちにコミュニティの人口構成は、次第に変動して行くのであります。

今から約20年位前の厚生労働省の統計によれば、2025年になると65歳以上の高齢者の全国民に占める割合が26%を越える、と予想していました。即ち、100人のうち26人が高齢者になるというのであり、所謂高齢化社会ではなく、将に高齢社会が到来すると謂っていました。

しかし、現実には、今年2015年で既に高齢社会になっています。したがって、高齢化の速度が約20年前の予想よりも10年早いのであります。

人間は、歳をとると効率のある労働を提供することが出来なくなりますから、必然的に誰かがその高齢者を養って行かなければならないことになります。したがって、100人のうち26人ということは、大体、4人に1人が高齢者でありますから、3人が1人の高齢者を養っていかなければならないことになります。

しかし、実際には、更にシビアな状況になります。何故かと言いますと、3人のうちには、赤ん坊も、未成年者も、働けない人も居ますから、実際には、2人で2人の高齢者・被扶養者を養って行かなければなら

ないことになります。

このようなことは、現在の社会制度のもとでは、税金の負担が大きすぎることとなりますから、国民の生活が圧迫されるのみならず、惹いては、国家財政にも影響することになります。したがって、将に今、激動の社会なのであります。

勿論、厚生労働省は、早くから社会資本の備蓄を叫んでいますが、社会資本を備蓄するということは、若い労働力が多くて、年々歳々、基金に金が入ってこなければなりません。

ところが、高齢社会になると、若者の数が減って、基金に入ってくる金も減るのであります。したがって、年金の財源も減ります。更に、年金管理の不祥事が続発したため、今、年金問題は危機状態にあることはご承知の通りであります。

更に、科学技術が発達し、近代医学が進歩したため、高齢者や被扶養者の数は増える一方であります。したがって、社会資本の備蓄という謂わば量の発想だけでは、この激動の時代を乗り切ることは絶対に出来ないと思うのであります。

そして、この激動の時代を生き抜いて行かなければならないのは、実は、今の青少年達なのであります。したがって、私達は、やがてこの世を去るその前に、この激動の時代を生き抜いていく智慧を青少年達に伝えておかなければなりません。これが青少年奉仕の核心にある問題であろうかと思うのであります。

## 9. 「青少年奉仕」 その5

前回は、私達がやがてこの世を去る前に、激動の時代を生き抜いていく智慧を青少年達に伝えておくことが青少年奉仕の核心にある問題であると申しました。では、激動の時代を生き抜いて行く知恵とは、一体何か。

結論から言えば、それは心の問題であります。世界がどんなに広くても、それを動かすものは人間であり、その核にあるものは一人々々の人間の心であります。そのことは、例えば、人間の倫理の退廃によって、紀元前3世紀から6世紀にわたって隆々と栄えた古代ローマ帝国が滅亡したこと、或いは、一人々々の国民の心の中の小さな小さな不満が積もり積もって、遂に、1989年、ソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させたことなど、歴史を見れば明らかであります。

今、文明が衝突して民族同士が憎み合い、経済的に豊かな北と、貧しい南とが反目し合う現在の世界市場経済の中で、この錯綜した利害関係を如何にして調整出来るのか、全く先が見えないのが現状であります。

更に、地球温暖化というグローバルな現象についても、それがやがて風水害をもたらし、世界経済に重大な影響を及ぼすことは明かであります。にも拘わらず、各国は自国の目前の利害即ち、現象にのみこだわって、物事の本質を見抜く目を持たないために、その鍵になるものが混沌として、未だに何も見えてこないのが現状であります。これが、今、私達の目に見えている現象の世界であります。

さてそこで、ロータリーは、現象に惑わされずに本質を見抜く思考であります。では、本質を見抜く、とは具体的にはどの

ようなことなのか。

今、世界的な視野でものを見た場合、色々な考え方があろうかと思いますが、例えば、我が国は、教育の問題については、未だに専ら人間の能力を測る試験第一主義の教育が横行しているのが現状であります。しかし、本質的には、もっと人間を大事にするインダクティヴ Inductiv な教育を重視すべきであると思います。また、経済の問題についても、今、世界を席卷しているグローバルスタンダードというものは、詰まるところアメリカの利益中心の考え方であるといわなければなりません。したがって、物事の本質を見るならば、各国の古来の慣行や民族の生き方を尊重してナショナルスタンダードに還るべきであると思います。

何はともあれ、ロータリアンは、クラブ例会で親睦のうちに心を磨く、詰まり、自己研鑽、切磋琢磨によって、世界的な視野でものを見ることが出来るのであり、更に、先を見ることも出来るのであります。このようにして、ロータリアンは、激動の時代を生き抜く智慧を授かることが出来るのであり、その智慧を若者達に伝えなければなりません。しかも大事なことは、若者達に、その智慧を身に付けさせるためには、若者達と共にその問題意識を持って共に考えて行かなければならないことでもあります。そのための青少年奉仕であります。これは緊急を要することであり、ただ、漫然と奉仕の議論をしている暇はないのであります。

## 10. 「青少年奉仕」 その6

前回は、ロータリアンは、激動の時代を生き抜く智慧を若者達と共にその問題意識を持って共に考えて行かなければならないということをお話致しました。

では、激動の時代を生き抜いていく智慧とは一体何か。それには色々な考え方があろうかと思いますが、一つは、従来のような社会資本を備蓄するという量の発想を否定して、抜本的な発想の転換を図らなければならないと謂うことであります。謂わば、ものの見方を変えることであります。

有名な『種の起源』を書いたチャールス・ダーウィンは、『地球上の生き物は、全て生き残るチャンス을求めて進化して行く。最も強いものや、最も賢いものが生き残るのではない。最も変化に適応したものだけが生き残る』と謂っています。

その変化に適応出来なかったものは、不適格者として脱落するのであります。したがって、新しい時代に適應するためには、今までの考え方を新しい時代に合った論理に変えなければならないのであります。

21世紀になって時代は大きく変わりました。経済の視点から見れば、従来の右肩上がりの経済の発展は、最早望むべくもありません。したがって、今までの時代の延長線上に21世紀の未来は無いと考えなければなりません。したがって、あらん限りの智慧を振り絞って古い流れから抜け出し、新しい流れへと変身しなければ生き残れないのであります。

では、新しい時代の論理とは一体何か。色々な考え方があろうかと思いますが、一つの考え方としては、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックが書いた「危険社会」と

いう本が参考になります。20世紀の終わりにベックは、その本の中で、「技術社会の進歩が人間の生存を脅かす時代になった。このまま生産を続けて、モノが豊かで効率的な生活が良い、という考え方には、ブレーキをかけなければならない」と謂って、モノの側から警告しています。

また、同じようなことを経済の側から訴えたのが、1998年にノーベル経済学賞を受賞したインド系イギリス人のアマルティア・センであります。

彼は、今までの経済学では人間は豊かにならない。生産を効率よく進ませるための経済学ではなく、生活のための経済学を考えねばならない、と主張して、ノーベル経済学賞を受けました。彼は著書の中で大要次のように述べています。「新古典派経済学は、自己の利益を合理的に最大限に追求することを目的としているが、このように利己を中心とする動機は、精神的に貧しい。必要なことは、他者の存在に道徳的に関心を持ち、他者との相互関係を自己の価値観として反映させるような在り方がなければ、経済は成り立たない。その意味において、新古典派経済学は、『合理的な愚か者』と同意義である」という趣旨のことを述べています。センの主張は、ロータリー的に謂えば、Arthur Frederic Sheldonの謂う「自他を分かたぬ思考」を持たなければならないということかと思えます。

## 11. 「青少年奉仕」 その7

前回は、新しい時代に適応するためには、新しい時代に合った論理を身につけなければならないということを申しました。そのために必要なことの一つに発想の転換を図ることがあります。

では、如何にして発想の転換を図るのか。その契機となった例として、サリドマイド児の悲劇がありました。最初の悲劇はスウェーデンで起こりました。16歳の少女がサリドマイドを服用していたために、アザラシっ子と謂われる手のない子供を産んだのであります。

彼女は、手のないこの子はきっと不幸になるに違いないと思い、その子を殺してしまいました。当然、彼女は、殺人罪として起訴されました。

しかし、世間の人達は、彼女を哀れに思って、沢山の嘆願書を裁判所に提出しました。その結果、裁判所は執行猶予のついた温かい判決を下したのであります。このことによって、法律的には一応解決しました。一件落着であります。

しかしながら、倫理的には未だ何も解決されていません。何故ならば、神様から与えられた命が奪われたという事実は厳然として残っているからであります。

ロータリーの世界は、法律の世界ではなく倫理の世界であります。この事実を倫理の面でどのように考えるのか、ということが問題であります。

実は、彼女が、手のない子供は不幸になると考えたことが問題なのであります。それは、将に、役に立たないものを捨てて、役に立つものだけを大事にするという効率の論理だけに支配された考え方だからであ

ります。

手のない子供は役に立たない、したがって、見捨てられる、したがって、不幸になる、という論理であります。

悲しいかな私達は、ついこのように考えてしまいます。しかし、激動するこの21世紀が心の時代だとか、福祉社会だとか謂うのであれば、先ず、効率の論理だけに頼らずに、新しい時代に合った論理をも身に付けなければならないのではないのか。そうでなければ、福祉という言葉ばかりが空転してしまいます。

福祉社会というのは、手のない子供が不幸になる社会ではなく、この世の中に生きとし生けるもの全てが、健常者も、身体障害者も、老人も、子供も、どんな弱者でも、誇りを持って生きて行ける社会、皆が支え合って生きていく社会、共生の社会のことです。これは、効率の世界ではなく、将に質の世界であり、倫理の世界であり、したがって、それはロータリーの世界でもあります。

ロータリアンは、これらのことを次の世代を担う青少年達に話しかけなければなりません。インターアクトで、ローターアクトで、RYLAで、学校で、地域で、そして家庭で、そして職場で話かけなければなりません。これがロータリーの目的第3の意味することの全てなのであります。この努力なしに青少年奉仕を提唱しても、それは空しいものに終わるばかりであると思うのであります。

## 12. 「青少年奉仕」 その8

前は、ロータリアンは、ロータリーの世界が倫理の世界であり、共生の世界であることを次の世代を担う青少年達に話しかけなければならない、この努力なしに青少年奉仕を提唱しても、それは空しいものに終わるばかりであると謂うことを申し上げました。したがって、この視点から見る限り、青少年奉仕は、未だ未完成物語であると謂わなければなりません。

しかし、世界が如何に広くとも、世の中を動かしていくのは、詰まるところ、国民一人々々の心であります。したがって、ロータリアン一人々々が如何にして自分の生き様を確立すべきか、ということが大事なことであります。

そこで、ロータリアンは、クラブ例会での親睦のうちに自己研鑽に努め、切磋琢磨によって自らの心を磨きます。そのような日常の生き様の中から激動の時代を生き抜く智慧を授かることが出来ると思うのであります。

したがって、ロータリアンは、インターアクト、ローターアクト、RYLA、海外青少年交換その他様々な奉仕プログラムを実施していますが、それは結局、何のためにやっているのか、その一点がはっきり自覚されていないと、何をしても全てが空しい結果に終ることになる、と思うのであります。

そこで、昔、道元禪師が、中国の天童山の如浄和尚のもとで修行しておられた時の話を紹介しておきます。

道元禪師が昔の人の言行録を読んでいた時、かねて尊敬している先輩がそれを見て、『何のためにそんなものを読んで居るのか』と尋ねました。禪師が『古人の言行を学ぶためだ』と答えると、彼は重ねて『何のために

学ぶのか』と聞きます。禪師が『学力を養うためだ』と答えると、彼は更に、『何のために学力を養うのか』と聞きます。禪師が『日本に帰って多くの人を救うためだ』と答える。『何のために人を救うのか』と聞く。『万人の成仏を実現するためだ』と答える。『ぎりぎりのところ、それは、どういう目的のためなのか』と問い詰められて、道元禪師は、遂に返答に窮した、と謂うことを述懐しておられます。

これは、「畢境如何」という問いでありまして、それがあやふやであっては、何をやっても空虚に終るばかりである、ということ出道元禪師は謂っておられるのであります。

ロータリアンは、自分は何故ロータリーに入っているのか、そして、何故、この青少年奉仕をやるのか、その根本の理由がはっきり腹の中に入っていないと、何をやっても全て空しく終るばかりであると思うのであります。

私達は、青少年奉仕を实践するについても、その根本の理由を大悟徹底的に理解しておくべきであります。このことは、言うは易く、行うに難きことではありますが、ロータリアンの心の問題として避けて通れないところであります。

### 13. 「青少年奉仕」 その9

前は、ロータリアンは、何故、青少年奉仕を実践するのか、その根本の理由を大悟徹底的に理解しておくべきである、ということを申しました。

では、その根本の理由とは一体何か。色々な意見があろうかとは思いますが、一つ大事なことは、青少年の心を育てることです。殊に、最近の青少年の実態を見ると、その感を深くするのであります。したがって、今、我が国の青少年問題は、危機的な状況にあります。毎日のように新聞紙上、殺伐な事件が報道されます。日常茶飯事のように、人が殺されています。親が子を殺し、子が親を殺す。将に人間は本来如何にあるべきか、という人間の倫理・人の道というものが失われてしまっています。人を育てる必要性が痛感されるのであります。

どうして、このような状況になってしまったのか。

一つの原因は、戦後の倫理教育の空白、即ち、人間は本来如何にあるべきか、ということ教えるべき倫理教育が戦後は欠落してしまっただけであります。この点について、参考になるのは、今年3月23日、91歳で亡くなったシンガポールのリー・クワンユー元首相の話であります。

この人は、「シンガポール建国の父」と謳われた人であり、経済や企業経営について70年代から80年代にかけて日本を手本にしたのであります。

今から54年前、当時のシンガポールの厚生大臣リー・クワンユーは未だ弱冠37歳。しかし、物凄い愛国心に燃えていました。そして、『For the East！東へ向こう！』と言いました。

それは一体、何故か？「東には何があるのか。日本がある。日本を見習おう、そして、追いつき追い越そう」と言ったのであります。その当時、彼らが如何に日本を尊敬していたか、が判るのであります。

「日本は原子爆弾の洗礼を受け、敗戦のどん底から立ち上がって、戦後30年にして世界第二の経済大国を築き上げたのではないか、あの日本を見習おう。」と謂って頑張ったのであります。

そして、シンガポールは、学校の先生達を優遇し、建国の基礎に教育をおいたのであります。つまり、教育者を大事にしたのであります。

ところが、やがて30年位前からシンガポールは、「日本を見習うのは止めよう。Not for the East！日本の真似だけはするな！」と言い出したのであります。

それは一体何故か。「戦後日本の教育は、道徳を教えていない。日本は、知識を教える『知育』だけを大切にして、道徳を教える『徳育』を忘れていた。人間教育の一番大事な時期である小学校では、人間としてあるべき姿を教えるべきであって、小学校の先生はシンガポールでは大臣と同じ位に尊敬されている。しかし、日本は戦後、道徳教育をしていない。この国は、将来必ず滅びる。したがって、Not for the East！日本の真似だけはするな！」と謂うのであります。



## 14. 「青少年奉仕」 その10

前は、人間は本来如何にあるべきか、ということをお教えるべき倫理教育が、戦後は欠落してしまつたことについて申し上げました。

今、日本の最重要課題は、環境問題でも、経済問題でもなく、財政問題でもありません。それは青少年の教育問題なのであります。人間本来如何にあるべきか、ということをお教えるべき倫理教育が戦後は欠落してしまいました。教育は、国家百年の大計であります。それは、将に民族の興亡に関わる問題なのであります。ロータリーは倫理運動である、というのであれば、ロータリーにも一端の責任があります。

では、この状況に対して何か打つ手があるのか、と謂うと、ロータリーとしては、倫理を提唱することによって人を育てていく以外に何らの手だてもない、と言わなければならないのであります。したがって、今、緊急の課題は何か。

それは、教育、特に青少年の心を育てること、人の心を育てることです。そこで、ロータリーは、青少年の心を育てるプロジェクトとして、ローターアクト、インターアクトがあり、RYLAがあるのであります。

実は、世界的な視野をもって先を見る、ということについて、ロータリーの視点からこれを見ますと、近来、青少年の問題のみならず、ロータリアンについても教育の問題が等閑になっていることが痛感されるのであります。

何故かと申しますと、最近、ロータリーの基本的な知識を身につけていない会員とか、ロータリアンとしての素養を疑われる

ような会員が増えて来たように見受けられるからであります。

しかも、ごく稀にはロータリーの指導者といわれる人の中にもそのような人が居るということをお聞きます。真に嘆かわしくもあり、悲しいことでもあります。

しかし、私達は、ロータリアンである以上、どのようなロータリアンであっても、フェロー・ロータリアンとしてお互いに育て合つて行かなければなりません。

では、人を育てる奉仕の一番大事なものは何か、詰まり、ロータリーの奉仕の核にあるものは一体何か。

それは、人の心を育てることです。したがって、二宮尊徳翁の「田畑を耕す前に心の田畑を耕せ」という言葉を肝に銘ずべきであります。心の田畑を耕す、とは詰まるところ、人の心を育てることです。

この視点からみますと、最近のロータリーは、人の心が育っているようには見えないように思うのであります。例えば、青少年を育てることについても、若者達を甘やかしてしまつています。若者達に人間のあるべき姿を教えようとはせず、ただ、若者達に金を与えて何かの活動をさせることが青少年奉仕である、と考えているような傾向があります。これでは人は育たないのであります。そのために、前途有為の若者達を駄目にしてしまつているように思うのであります。

## 15. 「青少年奉仕」 その11

前回は、ロータリーが、青少年奉仕について若者達を甘やかしてしまっている、ということを示しました。

ロータリーは、若者達に金を恵むことよりも、その心を育てることが如何に大事であるか、ということを理解するべきであると思います。何でも金で解決しようという考え方は、ロータリー本来のものではありません。厳に慎むべきことではありますが、最近では、ロータリーの指導者の中にもその傾向が見受けられるかに思うのであります。

言うまでもなく、このことは、金を出すな、と言っているわけではありません。世のため人のために奉仕をするには、金が必要なき場合があります。その時には、財布の紐を緩めて、金を出すべき時には惜しげもなく出さなければなりません。世のため人のために奉仕する、ということは、大なり小なり自分の身を痛めることとなります。お金による奉仕にしても、労力による奉仕にしても、何らかの尊いものを犠牲にしなければならぬのであります。

ただ、ロータリーの奉仕は、基本的に個人奉仕が原則であります。団体奉仕は、決議第23-34号第6項の制約のもとにおいてのみ認められるべき例外的なものであります。殊に青少年奉仕は、若者達の心を育てる優れて精神的な奉仕であります。したがって、例えば、ローターアクトクラブの育成については、ロータリークラブや国際ロータリーは金銭的な援助をしてはならないことになっているのであります。にも拘わらず、各クラブ及び各地区は、ローターアクトに対して何十万円、場合によっては百万円単位の補助金を出しているのが現状

であります。そして、この援助による若者達の活動を青少年奉仕と称しているわけがあります。若者達も、援助を受けながらの奉仕に満足しているようであります。

このような、将に「人の禪で相撲をとる」ような奉仕に満足している若者達も問題がありますが、そもそもこのような活動を青少年奉仕と考えている各クラブ及び各地区の指導者の意識が問題であります。このような状況では、青少年の心を育てることなど到底出来ないと思うのであります。

因みに、昔、私達が伊丹ローターアクトを育てたときは、クラブからの補助金として10万円の予算がありましたが、殆ど予算を使うことはありませんでした。

当時のローターアクトクラブの会費は、1ヶ月当たり1500円、その内訳は毎月2回の例会の弁当代1400円と郵便代100円、合計1500円であります。これ以外の会員達の活動費用とか、他クラブとの会合その他諸々の会議に出る時の費用は、当然、会員の自費であります。これ以外にクラブの親睦のための費用が必要なときは、私達ロータリアンのポケットマネーで支弁していました。したがって、ロータリークラブの予算を使うことは、殆どなかったのであります。これがローターアクトクラブの本来あるべき育て方なのであります。

## 16. 「青少年奉仕」 その12

前回は、ロータリーは、ローターアクトクラブの育成については、各クラブやR Iの各地区が金銭的な援助をしてはならないことになっているということを申し上げました。それは一体何故か、というと、ロータリーは、ローターアクトをパートナーと考えているからであります。パートナーということは、ロータリーが社会に奉仕するに就いては、共に力を合わせて奉仕する仲間であると謂うことでもあります。したがって、ローターアクトは、他者から援助を受ける受益者であってはならず、逆に、他者を援助する奉仕者なのであります。奉仕者は、受益者であってはならないのであります。

ローターアクトが他者から金銭的な援助を受けて奉仕するなどということは、将に「人の禪で相撲をとる」ようなものであって真に恥ずかしいことでもあります。奉仕者は、自らの主体性を確立すべきであると思えます。

只しかし、ローターアクトを育てるときに、彼らの自費自弁ではどうしても必要経費が不足するときはどうするべきか。それが将にロータリアンの個人奉仕の出番なのであります。ロータリーの本来の奉仕は、個人奉仕であります。

個人奉仕は、金銭的な制約もなく、テリトリーによる地域的な制約もありません。全く融通無碍に如何なるニーズにも対応出来るのであります。だからこそ、個人奉仕は、ロータリーの本来の奉仕なのであります。

ところが、今のロータリーは、ロータリー本来の奉仕である個人奉仕の重要性を忘れて、団体奉仕にのみ集中する傾向があります。例えば、青少年奉仕についてみても、インターアクト、ローターアクト、RYLA、

青少年交換などのように地区が提唱する類型化された団体奉仕の実践とか各クラブの団体奉仕の実践には熱心であります、ロータリー本来の奉仕である個人奉仕の実践が忘れられているように思うのであります。ロータリーの奉仕は、このような類型化された団体奉仕に限られているわけではありません。例えば、障害者の支援活動として、日本点字図書館とか、東京光の家とか、口と足で描く芸術家協会とか、ひょうご障害福祉事業協会、その他沢山の個人奉仕があります。このような様々なニーズに対して、ロータリアン個人として、或いは、クラブとして、きめ細かく対応していく個人奉仕こそロータリー本来の奉仕なのであります。

昔、伊丹クラブの寺西会員は、新伊丹の駅前のバラ園の薔薇の手入れを密かに終生続けて居られました。このように、人知れず密かに世のため人のために奉仕するのがロータリーの本来の奉仕なのであります。この故に、日本ロータリーの創始者米山梅吉先生は、「ロータリーは、隠れたところに仕事がある。それは、隠れているから妙味がある。」という名言を残して居られます。

要するに、ロータリアンたるものは、ロータリーの核にある個人奉仕の絶対性を肝に銘ずべきであります。これは、ロータリーの第一義であります。

## 17. 「国際ロータリーとロータリークラブ」 その1

ロータリーには、重要な媒体が三つあります。第一は、ロータリアン、第二は、ロータリークラブ、そして第三が国際ロータリーであります。

そこで、この三つの媒体の中で一番大事なものは何か、と云いますと、それはロータリアンであります。それは一体何故か、とい云いますと、先ず、ロータリアンが地域社会から何人か集まってロータリークラブが作られ、ロータリークラブが世界中から集まって国際ロータリーが成り立っているのでありますから、これら三つの媒体の中核にあるのはロータリアンだからであります。

そこで、この三者の関係を正確に理解することは、ロータリアンの素養として大切なことではありますが、この三者の関係を正確に理解するためのキーポイントは一体何か。それは、この三者相互の関係が平等対等であるということでもあります。即ち、ロータリーの世界は、会社とか軍隊のような上意下達の縦型社会ではなく、平等対等な完全な横型社会であるということでもあります。

詰まり、ロータリーは、人の上に人を作らず、人の下に人を作らない、という平等対等な人間関係なのであります。したがって、ロータリアン同士も平等対等、各クラブ同士も平等対等、各クラブと国際ロータリーも平等対等、したがって、国際ロータリーとロータリアンも平等対等なのであります。

ところが、近来、ロータリアンの意識の傾向として、ロータリーを縦型社会の論理で理解しているロータリアンが多いように思うのであります。

例えば、国際ロータリーがロータリークラブよりも地位が高いと考えて、国際ロータリーの役員であるガバナーは、各クラブやクラブ会長より偉いと考えたり、ガバナーをロータリーの友情によって陰ながら助けているに過ぎない地区委員やガバナー補佐を各クラブやロータリアンより地位が高いと考えている人が増えているように思うのであります。これは、ロータリーの組織原理が解っていないものでありまして、ロータリアンとしては、少し恥ずかしいことなのであります。

ロータリーの世界は、人の上に人を作らず、人の下に人を作らないという平等対等な人間関係なのであります。ガバナーがクラブの会長幹事より偉いわけではなく、ガバナーがガバナー補佐や地区委員よりも偉いでもありません。

また、ガバナー補佐や地区委員が各クラブやロータリアンより偉いでもなく、クラブ会長がクラブ会員より地位が高いのでもありません。これら全ての人達が完全平等対等な社会、それが将にロータリーの世界なのであります。この点の理解が出来ないと、ロータリー運動が衰退して、遂には、Rotary rest in Peace !、即ち、死せるロータリー、となってしまうと思うのであります。

では、ロータリーの世界は、全てが万民平等対等の世界だとは云うが、一体、何故平等対等なのか、その点の原理を眺めてみたいと思うのであります。そこで、話は、当然の事ながら初期ロータリーの歴史に遡ることになります。

## 18. 「国際ロータリーとロータリークラブ」 その2

前回は、ロータリーの世界は、万民平等対等の世界であると申し上げました。では、何故、平等対等なのか。その点の原理を眺めてみたいと思うのであります。そこで、話は、当然の事ながら初期ロータリーの歴史に遡ることになります。

さて、ロータリーを運動体として見たとき、その中心になるものは一体何か。それは、ロータリークラブであります。ロータリー運動の中心は、全世界のクラブを統括している国際ロータリーではなく、ロータリークラブが中心であります。

では、ロータリー運動にとって、何故、国際ロータリーが必要なのか。ロータリアンとロータリークラブがあれば十分ではないか。何故、国際ロータリーという団体が創られたのか。

実は、その問いかけに答えるには、1927年までの初期ロータリーにおける親睦と奉仕の葛藤の歴史を振り返らなければなりません。

即ち、1905年、Paul Harris の発想から始まったロータリークラブは、当初は皆がお互いに仲良く助け合う親睦だけのクラブでありました。しかし、その翌年の春、Paul Harris は、Donald Carter の忠告によって、親睦だけでなく世のため人のための奉仕も考えるクラブでなければならない、と云ってクラブの在り方を変えようとなりました。このことがクラブの親睦が崩れ去る原因となったのであります。

何故かと言いますと、親睦は、クラブの中で、皆で仲良く助け合うこと、一方、奉仕は、クラブの外で世のため人のために動いていくこと、つまり、親睦と奉仕は、そ

のエネルギーの方向が相反するものであるからであります。したがって、クラブは、親睦派と奉仕派に真っ二つに割れて、荒れに荒れたのであります。

これを見て、偉大な組織管理者 Chesley R.Perry は、解決の道を模索します。「先ずロータリー運動にとって親睦はどうしても必要か。答えは明らかにイエスである。しかし、それでは奉仕を提唱し、提唱の拠点としての子クラブを作ることは出来ない。では、ロータリー運動にとって奉仕を提唱し、子クラブを作ることは、どうしても必要か。これも答えは明らかにイエスである。しかし、そのことによってクラブ親睦は崩れ去る。」

このように、「一方を立てれば他方が立たない」という相矛盾する要請を両立させる方法は何か、と考えた結果、彼は1909年末に至って一つの発想を得ました。それが連合組織体構想でありました。その構想とは次の通りであります。

シカゴクラブで奉仕を提唱すれば、親睦が崩れます。しかも、シカゴクラブが子クラブを作るということは、クラブにとって荷が重い仕事であり、結局、親睦も崩れます。したがって、奉仕を提唱し子クラブを作る仕事は、ロータリークラブとは別枠の団体を作って、その団体に任せれば、クラブの親睦を崩すことなく、奉仕を提唱し、子クラブを作る仕事も出来るわけであります。このようにして、創立されたのが全米ロータリークラブ連合会・現在のRIであります。

## 19. 「国際ロータリーとロータリークラブ」 その3

前回は、奉仕を提唱し、子クラブを作るためにロータリークラブとは別枠の団体として創られた連合組織体が全米ロータリークラブ連合会・現在の R I であるということを示しました。

そこで、当時、既に、シカゴクラブが 15 の子クラブを創っていましたので、シカゴクラブと合わせて 16 のクラブをもって全米ロータリークラブ連合会という連合組織体を創立し、その連合会に二つの仕事を委託したわけでありました。

一つは、「奉仕理念の提唱」即ち、ロータリーの奉仕の理念を社会に提唱することであり、もう一つは、「ロータリーの拡大」即ち、奉仕理念を社会に提唱していく拠点としてのロータリークラブを地域社会に創って行くことでもあります。

そして、各クラブは、この連合組織体の活動に協力しながら親睦を楽しめばよいというわけでありました。時に 1910 年のことでありました。

そして、翌 1911 年に、この二つの仕事のほかに、連合組織体に適した仕事として「情報の媒介」という仕事を加えるに至ったのであります。したがって、当時の 16 のロータリークラブ群が全米ロータリークラブ連合会に委託した仕事は、「奉仕理念の提唱」「ロータリーの拡大」「情報の媒介」の三つだけでありました。そして、このことは現在の国際ロータリー即ち、R I に引き継がれています。

このようにして、1910 年、Chesley R.Perry は、自ら発起人となり、全米のロータリークラブの代表をシカゴに招集して、連合組織体設立の consensus を得たのであ

ります。但し、連合組織体を設立するためには、各クラブの代表がこの連合組織体を承認するという案件を各クラブに持ち帰って、クラブの承認を取り付けなければなりません。

更に、シカゴクラブの場合は、全米ロータリークラブ連合会の初代会長も選出しなければならなかったのであります。何故かと云うと、初代会長は、親クラブであるシカゴクラブから出すべだと謂うことになったからであります。

時のシカゴクラブの会長は A.M.Ramsey でありました。そこで彼は、全米ロータリークラブ連合会の承認について議長として会議の議論をリードしましたが、議論は紛糾しました。その論点は、連合会の位置づけでありました。

即ち、「この連合会は、シカゴクラブよりも上位の団体として、シカゴクラブに対して命令権を持つ、というのであれば、承認することは出来ない。さればと言って、シカゴクラブが 15 の子クラブを生み、全クラブが集まって連合組織体が生まれるのであれば、連合組織体は、シカゴクラブの孫団体に当たる。したがって、各クラブよりも下位の団体であるとするのも論理が通らない。」

このような論議に数ヶ月を要し、結局、各クラブと連合組織体とは対等の地位に立つ、という考え方が出るに及んで、承認決議に漕ぎ着けたわけでありました。実は、この考え方はアメリカ合衆国の組織原理そのものなのであります。

## 20. 「国際ロータリーとロータリークラブ」 その4

前回は、全米ロータリークラブ連合会は、各ロータリークラブとは対等の地位に立つ、という考え方に基づいて、全米ロータリークラブ連合会の成立が承認されることになったこと、そして、この両者が対等である、という考え方は、アメリカ合衆国憲法の組織原理そのものであるということを示しました。

では、それは具体的には一体どう謂うことなのか、と申しますと、この対等論の考え方は、アメリカにおける連邦と各州との関係とパラレルに考えれば解り易いと思います。

即ち、アメリカの各州は、州とは謂っても完全な主権を持った独立国家でありますから、州よりも上の主権を認めることは出来ません。何故なら、主権というのは、最高絶対のものであって、州の主権の上に更に主権を認めることは出来ないからであります。もし、州より上に連邦の主権を認めるならば、州は主権を持った独立国家ではなくなり、日本の都道府県のような国家よりも下の組織になってしまいます。

一方、連邦も完全な主権を持った独立国家でありますから、連邦より上の主権を認めることは出来ません。もし、連邦より上に州の主権を認めるならば、連邦は、州の下にある多数国家間の条約機構になってしまいます。

詰まり、各州の主権を認めれば連邦の主権を認めることは出来ない、さりとて、連邦の主権を認めれば州の主権を認めることは出来ない、この相矛盾する要請を解決するために考えられたのが、州と連邦とは対等と考え、州の主権のうちの特定の権限だ

けを連邦に委託し、連邦は、その委託された権限のみを行使するという権限分配の考えであります。そして、何が連邦に委託された権限なのか、については、アメリカ合衆国憲法修正第1条第7項に規定されているのであります。

そして、この州の権限と連邦の権限とが、相互にうまくバランスがとれるように連邦最高裁判所が判決を下して行くわけであり

ます。実は、ロータリーにおける国際ロータリーと各クラブとの関係も、これとパラレルに考えればよいわけであり

ます。即ち、国際ロータリーと各クラブは対等であり、各クラブから国際ロータリーに委託された権限は、前回申しあげましたように、①奉仕理念の提唱 ②ロータリーの拡大 そして、③情報の媒介であります。このことは、決議23-34号第3項に明記されているところであります。

このようにして、国際ロータリーの役員であるガバナーとロータリークラブの役員である会長・幹事とは対等であり、したがって、ロータリーの友情によってガバナーに協力する地区の委員がクラブより上に位置するものではありません。

ロータリーの世界は、完全平等対等の世界でありまして、ガバナーも地区委員もクラブの会長・幹事も全て上下の階級構造にはなっていないのであります。

## 21. 「日本ロータリーの昔話」 その1

今日は、日本のロータリーの昔話を一つ紹介しておきたいと思います。先ず、大阪ロータリークラブでは、創立当初から特に親睦を重視して、アメリカのロータリーのように会員にニックネームをつけて親睦を深めたという話があります。

ニックネームをつける御役目は、土屋大夢氏、山本為三郎氏、伊藤忠兵衛氏の三人でありました。ニックネームは、平凡なものや、少しでも敬称の意味があるようなものは駄目で、罵倒するような名前をつけよ、ということでありました。

当時は、クラブが創立されて未だ間もない頃であり、しかも、会員は超一流の実業家ばかりでありましたから、会員達がお互いに心を開いてうち解ける状況には、未だなっていなかったのでありますが、伊藤忠商事の伊藤忠兵衛氏によれば、このとき、ロータリーは成功したと思ったそうでありました。

しかし、同時に、有力な会員を失うことになりました。私鉄経営のパイオニア・阪急電鉄の小林一三氏は、「こんな子供じみた会に誰が毎週集まるものか。すぐに消えるよ」と悪口を言って退会されましたが、その退会の理由の一つに、会員達がつけた「ペラ」というニックネームがお気に障ったのも確からしいのであります。この「ペラ」は、宝塚少女歌劇オペラから採ったものであります。

創立の時は、伊藤忠兵衛氏が満36歳で一番若く、44歳の村田省蔵氏が次に若かっただけに、この二人が何かにつけて小間使い役を仰せつかったそうではありますが、その後、伊藤忠兵衛氏より数歳若い山本為三

郎氏が入会しています。

このほかに、ニックネームとして面白いのは、伊藤忠兵衛氏は、義太夫の二の口村のくだりに「カネより大事な忠兵衛さん」という台詞から採って「かねより」。甲南大学の創立者平生鈺三郎氏は、声が大きいで「ラッパ」でありました。

この平生鈺三郎氏は、明治23年に東京高等商業（現一橋大学）卒業後、母校の助教授を経て東京海上火災に入社、専務取締役にまでなりましたが、在任中、甲南幼稚園、小学校、中学故、高校を相次いで創立し、甲南学園理事長に就任、一方、川崎造船社長、日本製鉄会長、鉄鋼連盟会長等を歴任して実業界で活躍すると共に1935年に貴族院議員、翌1936年に廣田弘毅内閣の文部大臣に就任し、1943年には枢密院顧問官に任じられて政界でも活躍した人でありました。

また、大阪商船社長の村田省蔵氏は、1939年に貴族院議員に勅撰、1940年には第二次第三次近衛文麿内閣の通信大臣兼鉄道大臣に就任しています。

また、名付け役の一人山本為三郎氏は、1917年日本製瓶会社を設立、続いて1921年に日本麦酒鉞泉会社を設立、後に朝日麦酒の社長になっています。

このように当時のロータリーは、超大物ばかりで組織されていましたが、その人達がお互いにニックネームで呼び合える仲間であったというのは凄いことだと思います。しかし、やがてこの慣例が消えていったのは、やはりアメリカの慣例が日本の職業社会には馴染み難かったのであろうかと思うのであります。



## 22. 「日本ロータリーの昔話」 その2

今日は、一般に殆ど知られていない話を致します。それは、日本のロータリー拡大の基軸となった東京・大阪の両本家クラブを始め日本のロータリークラブは、その会員が全て日本人であったと謂うことであります。その後、外国人が会員になっても、それは1クラブに数名に過ぎませんでした。

私が直木太一郎パストガバナーから頂いた昭和52年10月13日付けの手紙によりますと、直木さんが1974年に、「神戸ロータリークラブ五十年史」を編纂するに際して、国際ロータリーから手に入れたその当時の往復文書のコピーによって、次のようなことが判ったのであります。

即ち、国際ロータリーに対してロータリークラブの創立を希望したのは、神戸の方が大阪よりも早かったと云うのであります。1921年11月に神戸を訪れたシアトルロータリークラブ会員であったJ Tハーデマンが、『神戸にはロータリーに深い関心を持つ者が居る。海岸通り5丁目の貿易商S THUTA KAWAと明海ビルのホール・リリー商会のFMフラナガンその他がロータリークラブの設立を希望している。』と云うことを国際ロータリーの事務総長チェスレー・ペリーに報告したのであります。

そこで、チェスレー・ペリーは、その文書を当時の国際ロータリーの拡大委員長であったハリー・デヴィッドソン Harry Davidson に渡したところ、デヴィッドソンは、『自分がロータリークラブを設立する方針は、これまでのように、白人を主とするものではなく、その国の本国人を主たる会員とするべきである。

神戸の申し入れのように、白人を主たる

ものとするクラブよりも、日本人ばかりのクラブを作るべきであって、したがって、東京の次には大阪で作るということを福島喜三次と約束している。』

とチェスレー・ペリーに返事をしたのであります。そのことをチェスレー・ペリーから聞いたハーデマンは、神戸にクラブを作ることを諦めた、と云うことが判ったのであります。

東京ロータリークラブが1920年10月に設立された当時、このデヴィッドソンがやはりRIの拡大委員長であったかどうかは判りませんが、1928年、即ち昭和3年に東京で開催された太平洋地域大会 Regional Conference での報告によりますと、東京より先に出来ていた中国の上海ロータリークラブでは、会員の40%がアメリカ人、20%がイギリス人、中国人は25%であり、それも全て留学帰りか、又は所謂買弁（中国で外国商社と中国商人とが取引する場合に間に入って儲けた特殊な商人）でありました。そして、残りが日本人、フランス人、ドイツ人、イタリア人、スイス人、チェコ人、ポーランド人でありました。これは、將にアメリカ流ロータリーであり、万民平等を旨とするロータリーの本旨に沿ったものではありません。このことについては、次回に更に補足します。

## 23. 「日本ロータリーの昔話」 その3

前は、日本のロータリーが創立された当時、日本以外のロータリークラブは、その国の本国人以外の人で組織されており、白人を主たる会員とするものであったということを示しました。例えば、フィリピンのマニラロータリークラブでは、会員112名の内、フィリピン人は僅かに6名、スペイン人4名、イギリス人3名、中国、日本各1名、そして97名がアメリカ人でありました。これは、この当時、フィリピン人は未だ独立して居らず、アメリカ領であったためでもあろうと思われるのであります。また、インドのカルカッタロータリークラブも同様であったと謂われています。

以上のことは、今日においても、東南アジアその他の国のロータリークラブを見る場合、忘れてはならないことでありまして、ロータリアンであるその国の人のその国における立場や地位、境遇について、日本と同一に考えると大きな誤りを犯すことになると直木さんは警告しておられたのであります。

これらのクラブに比べて、東京ロータリークラブの場合は、William L. Johnston が設立手続を手伝ったにも拘わらず、そのCharter Memberには、一人の外国人も入っていなかったものであり、大阪ロータリークラブの場合も同じでありました。

神戸ロータリークラブの場合も、国際ロータリーの関係者からイギリス人1人をCharter Memberにと強く推薦されましたが、お断りをしたそうであります。

このように、もしHarry Davidsonの見識がなければ、恐らく、日本にロータリークラブが誕生したとしても、当時や今日と

は全く違ったものになっていたであろうことは想像に難くないのであります。

このようなことを考えると、日本におけるロータリーの誕生について、シカゴクラブのような庶民から作られたクラブと違って、一流の実業家ばかりをもって構成されたことに対する批判、詰まりロータリーの庶民化ということが屢々主張されるが、それは見当違いであると直木さんは説かれるのであります。その当時の日本の社会において、ロータリーの精神を理解し、それを運営する能力のある人と謂えば、やはり、米山さんのような一流の実業家でなければならなかったであろう、と直木さんは謂うのであります。

更に、直木さんの手紙によりますと、外国人の多いクラブでは、自国語で例会が開けないのであります。第2回太平洋地域大会で東京に来た国際ロータリー会長、メキシコのタンピコクラブのTom Suttonは、このことが実に残念だと直木さんに話したそうであります。タンピコクラブは、メンバーの過半数が外国人であり、14カ国に及んでいたもので、最初は、英語を使っていたが、1930年頃からスペイン語に変わったと謂います。日本は、この点、恵まれていると思うのであります。世界は、将に多様であります。これを忘れて、日本と同じ感覚で判断すると誤解を招くことになり、国際理解は出来ないと思うのであります。

## 24. 「日本ロータリーの昔話」 その4

今日は、日本のロータリーに未だガバナー制度がなかった時代の話をお話しします。それは、ロータリーの標語 "Service above self" についての神戸クラブの初代会長松方幸次郎氏と初代スペシャルコミッショナー米山梅吉氏との問答であります。

松方幸次郎氏は、イギリス育ちでありましたから、英語には堪能でありました。当時、米山氏がスペシャルコミッショナーとして神戸クラブを公式訪問した時に、松方氏が、『米山さん、私は日本人だから、英語のことはよく解らない。殊に "Service above self" という言葉はよく判らない。貴方は、日本の全クラブを統括するスペシャルコミッショナーであり、国際ロータリーを代表する人であるから、一つ、この言葉を納得のいくように説明して貰いたい』と言ったのであります。

ところが、米山氏は、どうしても、この言葉を原理的にうまく解説出来ませんでした。結局、米山氏は、松方氏に『貴方の言うことは、よく判らない』と言われてしまったという記録が神戸クラブの歴史の中に出て来るのであります。

流石の直木太一郎パストガバナーも、この理由がよく解りませんでしたので、英米法学者の小堀健助先生に『小堀さん、このところは一体どういうことでしょうか』と質問されたのであります。小堀先生は、これを研究課題として長い間、心の中に温めておられたのであります。ロータリー思想の理論構造を解明したときに、この疑問点が氷解したと云っておられました。

そこで、話は遡りますが、1911年、全米ロータリークラブ連合会の第2回大

会において Benjamin Franklin Collins が "Service, Not self" という標語を発表しましたが、その10年後の1921年頃、Arthur Frederic Sheldon が "Service above self" という標語を提唱しました。実は、その頃、シカゴのロータリアンが、"Service, Not self" という標語をロータリーの視点から分析していて、これは一寸おかしい、と考えたのであります。何故かと言いますと、ロータリーというものは、その根底に良質な職業人の "self" 即ち自我があります、ロータリー運動は、良質な職業人を運動の基本単位と考えるわけでありますから、そのロータリアンは、既に "self" 自我を持っています。したがって、"Not self" ではありません。Franklin Collins が言うように『自我を滅却して、神の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依しよう』などということは到底出来ることではないのであります。

もともと自我はあった。その自我を例会を通じて少しずつ改めていくことが、やがて、利己と利他とを調和せしめる。つまり、神様の世界に自分を没入させることになるのであります。それは聖者の世界の出来事であって人間にとっては死ぬまで不可能であります。したがって、この世にある限りは、人間はあくまでも人間なのであって、長所も短所も持ちながら自己改善をする。それが、やがて奉仕の世界に入っていく。この様な考え方からすれば、"Service, Not self" は妥当でない。"Not self" では "Service" は実現できないと考えたわけであります。

## 25. 「日本ロータリーの昔話」 その5

前回は、シカゴのロータリアンが "Service, Not self" を分析していて、Not self" 自己犠牲では "Service" は実現できないと考えた、ということを示しました。

つまり、ロータリアンの自我は、既に良質な自我である。その良質な自我を、更に良質化していくために、毎週一回の例会で自己研鑽に励む、という考え方をロータリーの思想の中核体だと考えますと、それは self を Not、即ち否定するのではなく、self の above、即ち上に Service を考える。これが "Service above self" なのです。

ところが、このように考えたものの実は、"Service above self" という言葉は、英語の慣用例の中にはないのであります。中世神学以来のマルチン・ルターなどの考え方は、Service という言葉は、即ち Not self" を意味したのであります。

人間というものは自由意思は持っていますが、神様の世界から見れば次元の低いものであります。したがって、絶対者である神に対しては自己を主張出来ない、自己を捨てて、ひたすら神の秩序体系の中に没入していくことによって、自分の二度とない人生を価値あらしめることが出来る。それ以外には、自分の価値など見つけることは出来ないという、これが中世人の考え方でありました。

この考え方が、近世社会に伝えられていますから、英米人が Service と言えば、これ即ち "Not self" を意味したわけでありました。したがって、"Service above self" という用語例はありません。したがって、"Service above self" というのは、実に奇妙な概念でありますから、この言葉が出たと

きに、シカゴのロータリアンは爆笑したというのであります。『ロータリーは、変だね。原理的に見てみると、自分達は、Service というのは、即ち "Not self" 自己犠牲だと思っていた。しかし、これではロータリーの一義が立たないので、ロータリーの原理である自己改善から組み立てて行くと、"Service above self" ということになる。これはおかしいね』と。つまり、"Service above self" で成程と納得するのは、英語が判っていない証拠なのであります。英語が判っている人はおかしい言葉だと思うわけでありました。

そこで話は前回に戻ります。神戸ロータリークラブの初代会長松方幸次郎氏は、イギリス育ちであり、英語がよく判っていましたから、『米山さん、私は日本人だから、英語のことはよく判らない。殊に "Service above self" という言葉はよく判らない。』と言ったのであります。詰まり、松方氏の考え方からすると、"Service" と謂うのは、即ち "Not self" 自己否定、自己犠牲なのであります。これでスカッと判るのであります。これが英語系国民の慣習なのであります。

"Service above self" などと、self の上に "Service" を乗せる考え方は、英語を素直に判る人には理解出来ないなのであります。したがって、松方幸次郎氏は、素直に英語の判る人、即ち英語の大家であったと謂うことが出来るのであります。

## 26. 「日本ロータリーの昔話」 その6

前は、元来、英語で "Service" と謂えば即ち "Not self" 自己否定、自己犠牲である、と謂うことを申し上げました。したがって、"Service above self" を「超我の奉仕」と翻訳するのは正しくないのでありまして、「超我の奉仕」というのは、"Service, Not self" のことなのであります。したがって、"Service above self" とは、米山さんの訳では、「奉仕第一、自己第二」と謂うことになるのであります。

このように、"Service above self" というのは、絶えず "Service" を志す心をもって自己改善を計るべし、ということであり、それは、「神の世界」即ち「宗教の世界」に至ることを意味しないのであります。

しかし、日常の自分の心を磨き、行動を改善すれば、それが地域社会万般を潤す契機になることは間違いないのでありますから、これを「実業倫理」と呼ぶわけでありまして。したがって、"Service" とは自己否定ではなく、自分を改善することであり、"Service, Not self" とは、概念の次元が異なるのであります。

要するに、"Service, Not self" は「宗教の世界」、"Service above self" は「実業倫理の世界」と謂うことになるのであります。したがって、英語の慣用例にない "Service above self" は Arthur Frederic Sheldon の造語であると思うのであります。

実は、当時、米山さんは、この両者の区別が判らなかつたのでありますが、それは英語の理解力だけの問題でありまして、米山さんも松方さんも、ロータリアンとしては超一流の実業人であったことは当然のことです。

日本ロータリーの創立者である米山さんは三井財閥の重役であり、また、松方幸次郎さんは、日本の資本主義の基礎を作ったといわれる明治の政治家松方正義の三男であり、川崎造船の社長であると共に松方コレクションで有名な美術収集家でもありました。このように戦前の日本のロータリーは、真の意味でエリートと呼ばれる人達によって組織されていたのであります。

直木太一郎パストガバナーの手紙によりますと、米山さんが東京ロータリークラブにおいて選んだ会員は、国際感覚を有する一流財界人ばかりでありまして、創立当初のシカゴクラブとは対照的に中小企業経営者は一人も居なかつたのであります。東京クラブは、日本の面目にかけてもシカゴやロンドン等の先輩クラブに負けてはならないと、例会運営も本場通りに整え、英文の週報を発行して各地に送ったりして、いち早く、その存在をロータリーの世界に認めさせています。

また、大阪クラブは、ロータリーの奉仕の理念やクラブの規則通りの運営などを当時の日本の社会の実情に調和させようと努力し、いち早く、定款・推奨クラブ細則その他を翻訳したりしているのであります。このようなことは、当時の一流財界人にして初めて為しえたことでありまして、このことを考えますと、昭和の初期から軍閥の弾圧を避けるためもあってロータリーの庶民化が提唱されましたが、これは見当違いであると謂うのが直木太一郎さんの見解であります。

## 27. 「日本ロータリーの昔話」 その7

前回は、直木太一郎さんの手紙から、東京クラブ創立時の会員は、国際感覚を有する一流財界人ばかりでありましたので、日本の面目にかけてもアメリカの先輩クラブに負けてはならじと例会運営も本場通りに整え、英文の週報を発行してその存在を世界のロータリーに認めさせたという話を致しました。

実は、このようなことは、当時の一流財界人にして初めて為し得たことでありまして、このことが戦前の日本ロータリーの高潔な精神伝統を築き上げる基礎になったことは疑うべくもない事実であります。

さて、「和魂漢才」という言葉があります。和魂は日本民族固有の精神であり、漢才は中国伝来の知識・学問のことであります。これは日本固有の精神をもって中国の学問を消化・活用することを意味しますが、「和魂漢才」をもじった言葉に、「和魂洋才」という言葉があります。これは、日本人としての精神を堅持しながら、西洋の知識・学問を受け入れることでありまして、日本の近代化は将に和魂洋才のスローガンのもとに始まったのであります。

実は、日本のロータリーも1920年、東京クラブの創立によってアメリカのロータリーを受け入れましたが、日本の先輩達は、将に和魂洋才の精神をもって日本の風土に馴染むように日本独自のロータリーを作るべくロータリーの日本化に努力したのであります。ただ、そのことの根底には、元来、思想も風俗習慣も異なるアメリカ発のロータリーに対する違和感があったのかも知れません。

しかし、日本の先輩達は、20世紀が戦

争と革命の世紀だと謂われたその激動の時代を見事に生き抜いて、素晴らしい精神伝統を残してくれているのであります。殊に、日本ロータリーの歴史の中核は戦前の歴史であります。このエネルギーの延長線上に戦中、戦後の歴史があるのであります。

就中、肝に銘ずべきは、戦前の日本ロータリーの高潔な職業倫理であります。例えば、日本の四代目ガバナー朝吹常吉氏、この人は帝国生命の社長時代、公私峻別を厳格にしたことであまりにも有名であり、その後輩藤川博氏の回顧文によれば、『一枚のハガキを投函するにも、社用のものは給仕に托されたが、私用のものは、必ず自分でわざわざメールシュートまで入れに行かれた』と謂います。

また、秘書の斉藤政之助氏は、『朝吹社長は、潔癖すぎる位潔癖な人で、社長室には1本別に私費で架設された電話があり、私用の際は必ずそれを使って、料金は自弁された。また、ご自分の費用で自家用車を持たれ、会社の車にはお乗りにならなかった。世の中には、財産を沢山持ちながら、会社の費用に便乗せんとする者の多いのを嘆いて、自らは潔癖を押し通された。しかし、他の重役達には、能率と体面を保つために会社の車をあてがって、自分が出来るからといって、これを他人に強制しようとはなさらなかったことは、如何にも尊いものであった』と記されています。今の政治家や事業家に聞かせたいものであります。

# 「今井鎮雄先生を偲ぶ」 R Y L A advanced course 余島

27.9.19

深川純一

今日は、近代俳句の始祖正岡子規の亡くなった命日であります。俳句では、この日を子規忌とか、糸瓜忌とか、獺祭忌などと謂っています。この正岡子規の後継者であり、日本俳壇の大御所であった高浜虚子に次のような俳句があります。

風が吹く仏来給ふけはいあり 高浜虚子  
というのであります。

これは、どのような状況で詠んだ俳句かと申しますと、葬式や法事などの際に不意に風が吹いてきて、まるで亡くなった人が訪れて来たような気がすることがあります。

勿論、それは風が吹いたときだけに限るものではありません。雨の場合もあります。例えば、お父さんの一周忌の墓参りの際に、急に虹が架かったりすると、「あっ、お父さんが喜んでいいる」と言った人もいます。しかし、蠟燭の灯がフッと揺れたりして、如何にも亡くなった人がやってきたように感じるのは、風が吹いた場合であることに異論はないようであります。

この虚子の句は明治28年の作品であります。何故こんな句を詠んだのか。と言いますと、実は、この句には、詞書、即ち、所謂前書きがついています。「8月、下戸塚の古白旧居に移る。一日、鳴雪、五城、碧梧桐、森々招集、運座を開く」という詞書であります。

この古白というのは、藤野古白という人のことで、正岡子規の年下の従兄弟でありまして、正岡子規の最も早い時期の俳句仲

間でありましたが、明治28年4月、子規が日清戦争に従軍した直後に拳銃で自殺をしています。そして、高浜虚子は、その4ヶ月後の8月に東京専門学校に籍を置き、この古白の旧居に転居しました。そして、早速、句会を開いた時の一句であります。このような経緯を考えますと、この句を詠んだときの雰囲気がよく解ると思います。

風が吹く仏来給ふけはいあり 虚子

ただ、よく見ればこの句には季語がありません。無季の俳句であります。高浜虚子は、正岡子規の後継者として近代俳句を提唱し、その生涯、徹頭徹尾、季題のある花鳥諷詠詩としての俳句を提唱し続けたのでありますが、彼は、生涯に2句だけ無季の俳句を詠んでいます。それは、この句ともう一つは、

祇王寺の留守の扉や押せば開く 虚子  
であります。如何にも俳諧の大御所らしい、こだわりのない一面を覗かせていますが、この「仏来給うけはいあり」の句は、4ヶ月前に自殺した人の家に引っ越して来たので、本当に今にも故人が現れるような気がしたのでありましょう。その時の気持をそのまま素直に読み上げたもので、季語を詠み込もうなどと謂う意識もなかったのだと思います。

枕を振るのはこれ位にいたしまして、私は、この余島に来ると、この虚子の俳句のように、今井鎮雄先生がその辺に居られるような気がするのであります。私にとって

余島というところは、そのような記憶を蘇らせてくれるところでもあります。

元来、人間の記憶というものは、月日が増えるにつれて薄れていくものでありますが、魂に沁み透るような体験は、却って、月日と共に益々鮮明になっていくように思うのであります。

実はRYLAについても、今井先生の思い出は、真に尽きることはありませんが、就中、最も衝撃的であったのは、今から37年前の第1回のRYLAでありました。今もなお私の脳裏に鮮明に焼き付けられています。この時の話は、既に何回かお話申し上げていると思いますが、今井先生のRYLAとも謂うべきものを語る時には避けて通れないものと思いますので、敢えて申し述べたいと思います。

例えば、暴風の中で焚かれたキャンプファイヤーのことや、執行孝胤ガバナーの「マッチの火」の物語、今井先生の「社会の変動と青少年の実態」という総括講義など、今まで何回も私の記憶に蘇って来たものであります。

元来、このRYLAは、今井先生に導かれながら始まったものではありましたが、その後の私のロータリー人生を変えてしまったと言ってもよいと思います。それほど鮮烈な印象を受けました。それは、私の人生における素晴らしい出会いの一齣でもありました。当時、私は未だ48歳、今井先生は10歳年上の58歳でありました。

さてそこで、執行ガバナーのことは時間の関係で割愛しまして、今井先生のことを少しお話したいと思います。

皆さん、ご存じのように、2006年5月に発刊された今井先生の著書に「時を刻む」という本があります。その中のキャン

プについての論考によりますと、今井先生のRYLAの基本構想には、その根底に、先生が戦後、1949年にシカゴのジョージ・ウイリアムズカレッジで学ばれたグループワークの考え方があります。先生は、ここで、キャンプを教育の補角(Complement)として捉え、キャンプの役割から説き起こし、キャンプの沿革、キャンプの形態、キャンプと社会との関連、キャンプの新しい役割などについて、詳細な論証をしておられます。そして、次のように述べて居られます。「時代が移り変わっていく中で、フレッシュエアー・スタイルのキャンプと呼ばれる野外プログラムを中心にしたものも、強調する教育のポイントが変わってきた。そのために、グループワーク・スタイルのキャンプも、プログラム展開の技術とか、リーダーシップの在り方やキャンプの場所の設定の基準などが変わってきている。

例えば、1951年に神戸YMCAは、グループワーク・スタイルのキャンプを完成させるため、2週間の長期キャンプを余島で行った。

学校教育を補完するような長期キャンプは、他にも例が見られたが、この余島のキャンプは、子供達の人格形成と成長に合わせたもので、戦後の新しい試みの一つであった。そのため、キャンプ・リーダーは、キャビン・カウンセラーと名称が改められただけでなく、キャビンの中でグループ・カウンセリングを行うリーダーとしての訓練が必要となった。」と説いておられます。これは、将にこのRYLAの原型ともいえるべき考え方であります。このように、このRYLAの基本構想の根底に、今井先生のキャンプというものに対する深い洞察を看



取ることが出来るのであります。

そして、先生は、「現代は高度に技術化された社会であって、そのために多くの孤独な人間を生み出し、他者との交わりが薄くなってしまった。その結果「家庭内暴力」となったり、「命の尊厳」が損なわれたり、「技術が倫理を無視」するというような状況が出てきている。

このような時代だからこそ大事なことは、キャンプファイヤーを囲んで、永遠の友情を誓い合う感動的な経験や、静かに海の彼方に沈んで行く夕日を見つめながら、謙虚に自然の大きさと作られたものの小ささを感じるというキャンプでの経験は、人間にとって、より重要な意味を持つことになるであろう」と説かれて、キャンプというものを人を育てる教育の補角として捉えられているのであります。キャンプの教育効果が如何に重要か、が解るのであります。

そこで、先ずキャンプファイヤーの話から入って行きたいと思うのであります。

皆さんご承知のように、カウンスル・リングと呼ばれる儀式の火を焚くところがあります。第1回のRYLAの時も、ここでキャンプファイヤーが焚かれたのであります。折悪しくその時は、暴風が吹き荒れていました。後で判ったことですが、この日、全国で死者行方不明15名、負傷者169名という被害がありました。

何故、そのような暴風の中でキャンプファイヤーを焚いたのか。

山の頂は特に風当たりが強かったので、キャンプファイヤーは風裏になる浜辺で焚くことも出来ました。また、食堂の中で焚くことも出来たのであります。

しかし、今井先生は、RYLAのディーンとして、敢えてこのカウンスル・リング

で焚くことを決断されたのであります。それは一体何故か。

今井先生は、『儀式の火を焚くというカウンスル・リングを持ってる青少年団体は少ないので、一つのシンボルとしてここを皆に見て貰いたい。暴風の中だから、キャンプファイヤーの演出としては失敗するかも知れない。しかし、その中に或る種の意図というものを読んで頂ければ結構だ』と言っておられました。

これは、受講生にリーダーの心というものを会得させるために、敢えて、暴風の中でキャンプファイヤーを焚くことを決断されたわけであり。恐らく今の学校教育の考え方からすれば、少しでも危険の伴うものは全て止めさせるということになると思いますので、暴風の中でキャンプファイヤーを焚くことなどということは、もってのほかということになるのでありましようが、今井先生は、青少年のリーダーを育てるためには何が一番大切か、ということから、敢えてこの決断をされたわけであり。

ここに、現象に惑わされずに本質を見抜く、という今井先生の姿勢を看取ることが出来ると思うのであります。

この時のキャンプファイヤーは、私が生まれて初めて体験した素晴らしいものであります。今井先生は、若者達とキャンプファイヤーを囲みながら、真に感動的な話をされました。キャンプファイヤーが終りに近づいて、ドボルザークの「新世界」のハミングが終わったとき、今井先生が若者達とフレンドシップサークルを組み、ほのかな火の明かりに照らされながら、このRYLAのディーンとして、静かに若者達を諭された言葉は、非常に感動的であり、印象的でありました。先生は、『キャンプファ

イヤーの間、私達をあかあかと照らし、温かさを与えてくれた火もようやく消えかかっています。私達は、この薪を通して三つのことを学びました。

第1は、薪は一本では燃えないということ。最初に、薪が組みたてられたように、それぞれが協力していなければ、火はあかあかと燃えないのです。

第2は、その薪は、今、燃え尽きて、すっかり崩れ落ちてしまっています。私達に光を与え、熱を与えてくれたために、一本一本の薪は灰になってしまっています。世の中に光りを与える奉仕は、それなりの時間と労力とその他の良いものを犠牲にしなければならぬのです。

第3は、この決意と協同があっても、運んできたトーチによって火がつけられたように、一つの目的が明確でなければなりません。

ここに来て、ロータリーの火がつけられ、諸君の奉仕の心と共同の作業がある時、キャンプファイヤーのように周囲をあかあかと照らすことが出来るのです』と説かれました。私達の心に強く残った真に感動的な話でありました。これは私にとって、キャンプファイヤーの教育効果の大きさを初めて知った貴重な体験でありました。

さて、人間の企画、立案、実施するプログラムには、得てしてハプニングが起こります。実は、第1回RYLAの最終日の講義は、関西学院大学の田中国夫先生の担当でありましたが、RYLAの直前に田中先生の恩師が急逝されたとのことで、今井先生が急遽ピンチヒッターとして講義されることになりました。このことについて、当時、今井先生は、そういうこともあるかも知れないと思って予め準備をされていたそうであります。

先生は、嘗て、御自分が地区幹事の時の地区大会で、講師が何かの理由で急に出席出来なくなったことがあったそうで、そのときに備えて予め代役を用意していたのだ、と言って居られました。したがって、何かを計画実施するときは、必ずそのことを考えておくようにと、その時教えられました。如何にも用意周到な先生らしいなと思ったことであります。

ところで、今井先生がピンチヒッターを務められたその講義であります。先生は、自分がピンチヒッターとなったことについて、「羊頭を掲げて狗肉を売る」の類になって申し訳ないと言っておられましたが、狗肉を売るどころではない、真に素晴らしい講義であり、私としては強烈なインパクトを受けた講義でありました。したがって、その時教わったことは、その後も時々引用させて頂いております。

その講義のテーマは、『社会の動きと青少年の実態』というものでありましたが、その講義が私のその後の生き方の指標となりました。そのため、この話は、今まで各地で何回も話しています。したがって、時間の関係で詳しい話は割愛しまして、その一部だけ紹介致しますと、その講義の中で、先生は、Paul Tillich という神学者の学説を引用されて、教育の三つの分野を説かれました。

第1は、Technical Education 技術教育。

第2は、Humanistic Education 人間がお互いに心豊かになろうという教育。

第3は、Inductive Education 人間とは何かという真実に招き入れる教育。

というのであります。

戦後日本の教育は、第1の Technical Education 技術教育一辺倒でありまし

た。昔、ソ連が初めて人工衛星スプートニクを打ち上げた時、先を越されたアメリカは慌てました。そこで、「大学に行くと100万\$儲かるよ」などと宣伝をして、技術教育を奨励したのであります。

そして、日本も同じように、技術教育一辺倒になって、世界第2の経済大国を築き上げました。そこまではよかったです。

しかし、その結果どうなったか。人間は本来如何にあるべきか、ということ教える倫理教育・道徳教育を忘れたために、Humanistic Education と Inductive Education の分野が欠落してしまったのであります。「肥えた豚になるよりも、痩せたソクラテスになれ」という言葉があります。これは、有名な経済学者ジョン・スチュアート・ミルの言葉だそうではありますが、この言葉は、現代社会の私達に対する警告とも受け取れるのであります。

戦後の日本人は、一体どのような目的で、どのような理想をもって、どのような価値観をもって生きてきたのか、と考えますと、物質的に豊かになることと、生活を享楽すること、言い換えれば、肥えた豚になることしか考えていないように思われるのであります。

ご存じのように、今の教育は、所謂進学コースで競争が非常に厳しいです。子供達は、幼稚園の時から競争に駆り立てられます。中学も高校も有名校へ入らなければ、良い大学へ行けない。良い大学を出なければ、良い会社へ入れない。良い会社へ入らなければ出世は出来ない、というようになっています。この考え方の根底にあるのは、将に効率優先の技術教育一辺倒であります。

今井先生は次のように説かれました。

『戦後の日本では、技術教育ばかりに専念したために、人間として大切なものは何か、

ということではなく、人間には、どれだけの能力があるか、ということ計る試験第一主義の教育が横行していると言ってもよい。

しかし、世界的な視野に立ってみると、世界の状況は、人間個人に中心をおいて、一人ひとりの人間の問題を考えなければならない状況になっていると思われる。技術教育というものから、もっと人間を大事にする教育、所謂教育革命が世界の中に深く潜行してきたように思われる。にも拘わらず、日本の現実、未だに技術教育一辺倒のように思われる』

と説かれたのであります。これが37年前の話であります。そして、この状況は、基本的には、今も全然変わっていないように思うのであります。

この Inductive Education というのは、人間とは何かという真実に招き入れる教育のことである、とは謂いますが、言葉自体があまりに抽象的であります。したがって、具体的には一体どういうことを意味するのか。はっきり言って、よくわかりません。難しい問題であります。

ただ、人間とは何か、という真実、その真実に招き入れる、ということは、究極的には人間の生命に関わる問題であります。したがって、この問題については、医学の立場からの意見もあり、また、宗教の立場からの意見もあろうかと思えます。しかし、事は医学も宗教も超えた人間そのものについての問いかけなのであります。

先ず、今井先生は、敬虔なクリスチャンであられましたから、その心の根底にはキリスト教思想があるのは当然であります。が、ロータリアンとしては、どのような思想の持ち主であられたのか。

ロータリーには思想があります。これは、

ロータリー思想という一定の質の思想であります。その思想は、大別して二つの標語に象徴されています。

一つは、"Service, Not self" 即ち、自己犠牲の奉仕であり、一つは、"Service above self" 即ち、自己研鑽の奉仕であります。したがって、ロータリーの標語に現れたロータリーの思想の視点から推測しますと、今井先生は、自己犠牲の奉仕 "Service, Not self" の世界に生きた人であったと思います。

それは何故か、と申しますと、今から37年前の第1回 R Y L A が終わった時、今井先生と私は、食堂のロビーで一寸休憩していました。そこへ受講生達がやって来て自分の T シャツを差し出して、これに何か書いてほしいと揮毫を求めました。

今井先生は、即座に「身を捧げよ」と書かれました。流石はクリスチャンだ、と思いました。何故かと申しますと、その言葉は、ロータリー思想の自己犠牲の奉仕 "Service, Not self" の思想を象徴的に表しているからであります。Not self。self は、自己、それを Not、否定する、即ち、自己犠牲であります。

「身を捧げよ」という、その心は、自分の身を犠牲にして、ひたすら宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依すること、これ即ち、ロータリーの奉仕である、と謂うのであります。それは、神に対して自己の存在を認めない、自己犠牲、自己否定、自己滅却の奉仕を意味する言葉でありまして、中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない、優れて宗教的色彩の強い思想であります。

実は、このロータリー思想は、1911年、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長ベンジャミン・フランクリン・コリンズ

Benjamin Franklin Collins が提唱したものであり、爾来、初期ロータリーの歴代の指導者は、殆どこの思想の持ち主でありました。当時、1920年以前は、アメリカ、イギリス、カナダというキリスト教国にしかロータリークラブがありませんでしたから、このことは寧ろ当然のことでありました。キリスト教国以外の国に初めてロータリークラブが出来たのは、1920年のことであり、この年に、仏教国インドと日本にもロータリークラブが創立されているのであります。

これに対して、このコリンズの提唱から約10年後の1921年頃、シカゴ・ロータリークラブのアーサー・フレデリック・シュeldon Arthur Frederic Sheldon が、ロータリーは宗教ではないのだから、そのような宗教的色彩の強い標語は適切でないとして、"Service, Not self" のように自己を犠牲にする Not self ではなく、自己の上に、即ち、above self で奉仕を考えるべきだとして、実業倫理思想に基づく "Service above self" という考え方を提唱したのであります。私達はこれを自己研鑽の奉仕と呼んでいます。そして、Paul P. Harris もまた、これに同調して、やがて "Service above self" がロータリーの公式の標語となるに至ったのであります。

では、"Service, Not self" の思想は、無くなったのか、と謂いますと、そうではなくて、ロータリーの思想の世界は色々様々な思想が共存しながら、しかも、お互いに他の思想を排斥することなく、全ての思想が恰も滔々と流れる大河の如く現在に至っているのであります。これがロータリー思想の潮流であります。

何はともあれ、今井先生の「身を捧げよ」という言葉は、真に崇高な思想の表現なの

であります。自分のことはさておいて、先ず人のために尽くす、これが先生の生き方であったと思うのであります。それなるが故に、先生は誰からも慕われる人であったと思います。それは、今井先生が人への愛情、人への思いやりということを中心に生きてこられたからであろうと思います。RYLAの受講生や学友に接するときも、私達に接するときも、体温を感じさせるような温かい雰囲気がありました。

ところで、今井先生は、このRYLAの始まった翌年の1980年に国際ロータリー第2680地区のガバナーに就任されましたが、その数年後、国際ロータリーの委員会（多分、青少年奉仕委員会であったかと思いますが、）へも出られるようになりました。その頃、先生は「RYLAも漸くロータリーの世界で市民権を得た」ということを仰っていました。

そして、先生が国際ロータリー理事に就任されたあとになって、国際RYLAが始まりましたが、その内容を見て驚きました。何故か、と申しますと、その基本構想が今井先生のRYLAの基本構想と殆ど同じであったからであります。

RYLAは、元来、1960年代にオーストラリアのクイーンズランド州で始まり、1972年、アメリカのタコマで開催されてから、将に草原の野火のように全米に拡がっていったものであり、これがオリジナルなRYLAであります。国際RYLAは、このオリジナルなRYLAとは全く異なったコンセプトでありました。これは、今井先生の影響力の大きさを物語るものであると思うのであります。

因みに、今、日本の各地区で行われているRYLAも真に多種多様であります。

当地区のように3泊4日の日程で、受講者の人格形成に重点を置いたRYLAは、他に類を見ないものであります。私達は、今井先生がこの余島のRYLAを育てて下さったことを心から有り難く感謝しているわけであります。

ところで、私がこの余島に来て初めて知ったことの一つに、今井先生がこの余島で、戦後の日本で初めて手がけられた肢体不自由児キャンプのことがありました。

初めて余島に来て、インフォメーションセンターに掲げられている西村勇三君の薔薇の油絵をみましたが、今井先生にこれは足で描いたのだと聞いて驚きました。

今井先生は、この余島で子供達のキャンプを始め、肢体不自由児キャンプ、少年少女キャンプ、その他様々なキャンプを実施され、更に、身体障害者や知的障害者の問題にも関わっておられたのであります。それは何れも、その人達に対する深い愛情や思いやりの心なしには出来ないことであります。

先ほど申し上げました2006年5月に発刊された今井先生の著書「時を刻む」の論考によりますと、先生は、1950年（昭和25年）にアメリカを旅行中に、新しい試みを二つ発見されましたが、その一つは、肢体不自由児のためのキャンプであり、一つは、「肢体不自由児のためのキャンプ」という本でありました。先生は、このことについて次のように述べて居られます。即ち、「この二つの発見で、私は、障害を持つ子供が社会から隔離され、時には家族すらそのような子供がいることを隠しがちで、また、福祉施設がともすれば地域に背を向けて存在するような日本の状況を考え、この肢体不自由児キャンプは、大切な啓発運動の始まりとなるのではないかと

考えた。

アメリカ社会を福祉的視野で見ると、人々が「弱い」人達と共に地域社会の中で生きていこうとする姿勢は非常に印象的であった。このような経験が、私がYMCAでキャンプ・プログラムを展開する大きな契機となったのである」と述べておられます。余島のキャンプの原点は、実にここにあったのであります。

そこで、俳句をもう一句紹介します。

鴨撃ちの家の女房子を抱く 高野素十

この句は、この話の冒頭に申し上げた高浜虚子の高弟高野素十の句であります。高野素十という人は、私がこの世に生を享けて、はじめて正師だと信じた人でありました。正師というのは、自分の生涯かけて本当の師匠だと信じた人であります。

鴨撃ちの家の女房子を抱く

一体、この句の何処が良いのか、この句の良さが判らない人も多いと思います。実は、「鴨撃ち」というのは、俗に「またぎ」と謂われているように、山の猟師のことです。昔から「またぎ」は、一般社会の人達から差別され、蔑まれて、非常に貧しい暮らしをしていたのであります。一般の人達からは、まともに付き合っただけ貰えない、そのような家の女房が子供を抱いて幸せそうにしているのを見て、この作者は、良かった、よかったと思った、というのであります。そこには、作者の弱きものを慈しむ温かい心、慈しみの情があります。

この句は、表面的には、ただ、鴨撃ちの女房が子供を抱いているという事実だけを述べているに過ぎないのであります。その奥にある情の世界、即ち作者の心を汲み取らなければ俳句の鑑賞は出来ないのであります。

俳句といえば、兎角、侘び寂びの世界だ

と決め込んで居る人も多いかと思いますが、近代俳句には、このような情の世界もあるということも理解していただきたいと思うのであります。殊に、若い人達には、日本の心を未来に伝えていくためにも是非とも理解して欲しいと思うのであります。

私は、ロータリーの世界に入って、今井先生にRYLAの世界に導かれながら、素十先生の弱きものを慈しむ心を今井先生に感じたのであります。それは、肢体不自由児を始め身体障害児など身体にハンディを持つ人達を慈しむ温かい心でありました。

さて、今井先生は、今から34年前に身体障害者のニーズに応じて重度身体障害者の施設を立ち上げられましたが、その経緯は次のとおりであります。

まず、先生は、兵庫県の知人や会社の経営者から寄付を募って、5千600万円の財源を確保されました。そこで、これを元手にして国に助成金の申請をして2億5千万円の助成金を引き出し、更にこれを元手にして福祉振興財団から2億5千万円の融資を受け、合計5億6千万円の資金をもって社会福祉法人「ひょうご障害福祉事業協会」を設立し、その運営施設として兵庫県の西播磨に重度身体障害者施設「はりま自立の家」を竣工させられたのであります。

そして、これに止まらず、更にその数年後、今度は阪神地方のニーズに応えるべく同様の方法によって、今度は7億2千万円の資金をもって、重度身体障害者施設「はんしん自立の家」を竣工させ、更にその数年後、やはり同じ方法でもって、今度は西播磨の宍粟郡に知的障害者施設「しろう自立の家」を竣工させられました。

そして、更にその後、北摂津の三田地方

のニーズに応じて、知的障害児通園施設「かるがも園」を竣工させられ、合計20数億円の事業を実施されています。

勿論、この事業は今井先生の個人奉仕でありますから、今井先生の名前が表に出ることはありませんし、ましてや先生の所属しておられる神戸西クラブの名も表に出ることはないのです。いみじくも日本ロータリーの創始者米山梅吉先生が謂われたように「ロータリーは隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある」という言葉通りのことを先生は実践されたわけであります。

これは、実に凄いことでもあります。今井先生だからこそ出来たことであり、今井先生個人の奉仕が如何に素晴らしいものであるかを物語るものであります。

今、仮に、この事業を今井先生が所属しておられた神戸西クラブが実施出来るか、と言いますと絶対に出来ないと思います。

第一、財源が確保できません。この事業を起し上げるための最初の財源は、クラブの財源としては、ニコニコ箱の財源だけです。神戸西クラブのニコニコ箱財源は、恐らく年間500万円前後位かと思われれます。しかも、この500万円を全て一つの事業だけに使うことは出来ませんから、実際に使える金額は更に少なくなります。

更に、仮に会員個人から寄付金を募ることが出来たとしても、億単位の多額の金は集まりません。

また、地域社会の人達や会社から寄付を募るとしても、クラブという法人格のない団体では、誰が責任を取るのか責任の主体がありませんから、このような団体に多額の寄付をすることはありません。

また、地域の人達も、自分達よりもロー

タリアンの方が遙かに金持ちだと思っていますから、恐らく寄付には応じないだろうと思います。したがって、神戸西クラブが5千600万円の財源を確保することは、到底出来ないことなのであります。

これに対し、今井先生の場合は、先生が常日頃、地域社会や職業社会の人達のために、何かにつけてお世話をしておられますから、その人達は先生が信用できる人であるということをよく知っています。したがって、先生のためなら出しましょう、と言って500万円、1000万円と出してくれます。これは、今井先生に信用があるからこそ出来ることなのであり、それは、とりもなおさず、今井先生のお人柄によるものであると謂えるのであります。

このようにして、この事業は、今井先生の個人奉仕だからこそ実施できたことであります。したがって、クラブや地区の団体奉仕よりも、個人奉仕の方が遙かに大きな仕事出来るのであります。

そして最も大事なことは、今井先生のような立派な人を育てることがロータリーの本来の奉仕なのであります。この故に、ロータリーの奉仕は育てる奉仕である、と謂われているのであります。

1974年度の国際ロータリー会長William R.Robbinsは、「ロータリーの価値は何によって測られるか。それは国際ロータリーやロータリークラブの規模の大小や会員数の多寡ではない。そのクラブが如何なる人を育てたかによってロータリーの価値は測られる」と断言しているのであります。神戸西クラブは、今井先生のような立派なロータリアンが育ったことを誇りとすべきであります。

次に、今井先生の弱きものを慈しむ目は、

職業社会や地域社会のみならず、国際社会にも向けられています。今井先生は、御自分の著書「時を刻む」の中で「ロータリーの新しい可能性を」と題して次のように述べて居られます。

「昨年（2005年）私は、インドで開かれたポリオ・サミットに出席しました。日本からは、私一人でしたので、日本の存在は目立たない。

ところが、アフガニスタンから来ていた人が『アフガニスタンのポリオ撲滅のために大きなお金を送ってくれたのは日本です。お陰でポリオはだんだん減っています。ここに日本から代表が来ているので、私は公に、日本にありがとうと言いたい』と発言されました。

私達が世界から期待されるものは何か。日本のロータリアンが、今行っている奉仕が、世界における日本への信頼を築く上で大きな役割を果たしています。

その意味で、私達ロータリアンは、日本の良心を代表しているとは言えないでしょうか。世界の人々は、私達の奉仕の業を通して日本を立派な国だと思ってくれているのです。

今、私達の国は、教育もだめ、経済もだめ、政治的信用も得ていない。日本は、地球の上でしょんぼりした国になるかも知れません。しかし、どんなに苦しい時も、ロータリーを通じた私達の働きが世界の人々にとって大事な働きであり、それによって世界の人々が日本を認めてくださるなら、やはり私達はやり続けて行くべきではないでしょうか。

日本の人からも世界の人からも『あなたにはロータリアンですか。世界の人達のために、地域の人達のために、弱い人達のために、あなたが働いてくれているのですね。有り難う』と手を握られるような、そ

うロータリアンになりたいものです。」

今井先生の言葉は、何時も人々に対する愛情をもって諄々と説いて温かく、且つ、世界的な視野をもって鋭いものがあります。

しかも当時、既に84歳の今井先生が、将に老骨に鞭打って1人でインドまで行かれたわけであります。この使命感と弱きものへの献身には、深く頭の下がる思いであります。

皆さん、ご存じのように、余島の食堂の前にある碑には、今井先生の言葉が記されています。「人と出会い、神と交わり、愛の火の燃えるところ」

私は、この言葉を初めて見たとき、これはロータリーそのものだと思います。「人と出会い」というのは、ロータリーにおける出会いの保障であり、「神と交わり」という言葉は、奉仕哲学の追究を意味しています。そして、「愛の火の燃えるところ」という言葉は、奉仕の実践を意味しています。将にロータリーそのものであります。

このような詩を作られる今井先生は、きっと理想主義者であり、ロマンティストに違いないと思います。しかし、先生は、単に理想を追い求めるだけではなく、同時に、その理想を実現する素晴らしい企画力と強靱な実行力を兼ね備えて居られました。その実績は先程来申し上げたとおりであります。

仏法の世界に拈華微笑という言葉があります。仏法の極意は、言葉を超越して、ひと枝の花を拈り、口辺に僅かに微笑を湛えることによって伝わる体のものである、というのであります。

翻って、私は、今日まで今井先生に導かれながら、徒に馬齢を重ねて来た思いであります。今、今井先生亡き後、果たして今井RYLAを微笑をもって了解することができるのかどうか、真に忸怩たる思いであ



ります。

「今井 R Y L A」の心を会得するには、情と理を兼ね備えなければならないと思います。行動を起こすとき、必ずしも雄弁である必要はないが、さればと謂って、判る者だけが判ればよい、という独善的なものであってはならないのであります。

また、今井先生の話は、諄々と説いて温かく、そして鋭い説得力がありました。歩々清風を起こす、という言葉がありますが、今井先生の行くところ、何時も爽やかな風が起る、先生はそういう雰囲気を持った人でありました。

晩年の先生には、頭の下がる思いをしたことが屢々ありました。

例えば、70歳を過ぎて国際ロータリーの理事という激職も引き受けられましたが、このことなど將に、ロータリーのためにも身を捧げられた思いであります。

90歳を過ぎた或る時、外国から来られた国際ロータリーの役員をわざわざ関西空港まで出迎えに行かれたことがありました。私は、御高齢を押して、そこまでなされる必要はないのに、と思いましたが、誠実な先生としては、蓋し当然のことと思って居られたのかも知れません。

また、亡くなられた年にも、94歳の御高齢にも拘わらず、日韓親善会議の委員長として韓国へ行かれたのには驚きました。將に、先生の生涯は、働きづめに働いて使命を全うされた感が深いのであります。

最後に、この話の冒頭に申し上げた俳句に戻ります。

風が吹く仏来給ふけはいあり 虚子

何故、そのような気配になるのか、私には解りません。この世の中には、どんなに科学が発達しても、人間には判らないこと

が多すぎます。そもそも人間というものは一体誰が作ったのか、ということさえ何も判っていないのであります。

科学というものは、人間が作り出したものであって、神様が創り出したものではありません。私達は、この宇宙を統べてある大いなるものの存在を認めないわけには行かないのであります。このようにして、私達は、ひたすら謙虚であるべきであります。

先程申し上げましたように、今井先生は、「キャンプファイヤーを囲んで永遠の友情を誓い合う感動的な経験や、静かに海の彼方に沈む夕日を見つめ、謙虚に自然の大きさと、作られたものの小ささを感じるキャンプでの経験は、人間にとって、重要な意味を持つようになるであろう。」と説かれました。

その今井先生が亡くなられても、私達が余島に来て先生を思い、何時までも先生を愛しく思う心は、美しいロマンであると思います。そして、そのロマンは、私達の心の中にこそ何時までもあるのだらうと思います。

太陽が西の山の端に沈み、或いは、海に沈んでいく情景は、真に壮大であります。それは、激しく燃え切った一日の生命が静かな安らぎの世界に帰って行く姿であり、それを眺めながらもの思うことは、素晴らしいロマンであり、壮大なロマンであると思います。それは、忘れ得ぬ人、愛しいものに思いを馳せる美しいロマンでもあります。私は、この心の中のロマンをこそ大切に、残された命を大切に生きて行きたいと思うのであります。

これが今井先生を偲ぶ今の心境であります。有り難うございました。

# 「リーダーの中のリーダーとは」 RYLA学友会卓話

2016.1.16

深川純一

新年明けましておめでとう御座います。

新しい年を迎えましたが、「あら玉の春」という昔ながらの美しい言葉があります。やはり新年ともなれば、生まれ替わったような初々しい感じがするものであります。過ぎ去った一年、そして、新年に改まった一年、ただこの一年という月日、子供の頃は、一年を長いと思いましたが、年をとった今は、一年をあまりにも短いと感じます。どちらに感じても、一年の長さは科学的には変わりはありません。

しかし、事実、長いと感じ、短いと感じる違いはあります。何故か。それは結局、長いか短いかは心の問題だからであります。

そこで、私達は、どうしても「心のあり方」を考えなければなりません。そして、時間に対する「心のあり方」とは、所詮人生に対する「心のあり方」であります。一年の長さが、時間的には全ての人にとって同じであるように、人生の長さも、平均的には全ての人にとって同じであります。だからこそ、後になって短かかった人生を悔やまぬよう、改めて今年は何をなすべきか、を考えなければならないと思うのであります。将に、時間の使い方は、命の使い方であり、繰り返すことの出来ない一回きりの人生を大事に過ごしたいものであります。

さて、今日は、「リーダーの中のリーダーとは」というテーマをいただいております。但し、深川先生の教育者の立場から見て、という断り書きがついています。

実は、私は、学校法人の理事長でありますから、教育者というよりは寧ろ経営者であります。したがって、人を教える立場、詰まり、教育のプロではありません。

しかし、理事長という立場上、教育の世界には教師同様に強い関心があります。したがって、教育のプロではありませんが、教育のプロを外から冷静に見ることが出来る立場にはあると思います。そこで、思いつくままに私見を申し述べたい、と思うのであります。

さて、RYLAは、リーダーの中のリーダーを養成するためのものであります。先般、リーダーの中のリーダーになるためには、一体どうすればよいのか。という問いかけがありました。

そこで、先ず、リーダーという言葉の意味を整理しておきたいと思えます。

元来、リーダーという言葉は、日本語では「指導者」という意味であります。その概念は、かなり広いものであると思えます。一般的には、一国のリーダーとか、地域社会のリーダーとか、企業のリーダーとか、ロータリークラブのリーダーとか謂うように、或る組織の長たる立場にある人のことをリーダーと謂っております。そうだとすると、リーダーと呼ばれる人は、この世の中には掃いて捨てるほど居るわけであり、

しかし、その中でリーダーシップのあるリーダーは少ないのであります。就中、真のリーダーシップを持ったリーダーは非常

に少ないのであります。

そこで、リーダーの中の真のリーダーを如何にして養成するか、ということが、将に問題なのであります。例えば、一国のリーダーについても、その養成が如何に難しものであるか、が解ります。

私が去年の R Y L A の総括の冒頭で話したことではありますが、今から6年前の2010年6月、イギリスで最もよく読まれている雑誌である「エコノミスト」に「リーダーレス・ジャパン」（リーダーの居ない日本）というテーマの論説が載りました。その内容は、鳩山元首相の幼稚性と、菅元首相の自己決定能力なく権威あるものに従う、という趣旨の記事でありました。

そして、日本の雑誌「プレジデント」にも、迷走民主党というテーマの論説が載りました。将に、当時の日本は、その時期にこそ如何にしてリーダーシップを発揮するべきか、ということが問われていたわけであります。

この時の日本は、将に冷静な判断力、明確なビジョン、そして一番大事な誠実さというものが日本のリーダーに問われていたわけであります。一国のリーダーにリーダーシップが無くなれば国が滅びます。

その後、状況は若干よくなったとは思いますが、一国のリーダーの真のリーダーシップが発揮されているか否か、という点になると、未だ疑問なしとしないのであります。

では、ロータリーは一体どうなのか。今、世界中のロータリークラブの連合体である国際ロータリーも、そのリーダーシップが少しおかしくなってきました。

また、国際ロータリーを支えている世界中のロータリークラブも、そして、ロータリアンも、そのリーダーシップが少しおかしくなってきたのではないかとも思うので

あります。

ただ、ロータリーの世界では、リーダーという言葉をもう少し広い意味で使っています。例えば、R Y L A は、「青少年指導者養成計画」と翻訳されていますが、ここで謂う指導者というのは、文字通り「青少年の指導者」即ち、学校や地域社会にいる青少年の指導者全般を含む広い意味での「指導者」という意味であります。したがって、学校の先生も、Y M C A のリーダーも、ボーイスカウトのリーダーも、青年団のリーダーも、これら全てを含めて青少年の指導者であります。それらの「指導者」の中の指導者、詰まり、リーダーのリーダーを養成するのが R Y L A であります。

ところで、リーダーのリーダー、詰まりリーダーの中のリーダーとは一体何か。

一見、非常に難しいことのように思われますが、必ずしも、難しいことではありません。誰でも、心の持ち方一つでリーダーの中のリーダーになれるのであります。そのことについては、後で詳しく申し述べます。

ところで、皆さん方 R Y L A の学友達もリーダーの中のリーダーではありますが、しかし、リーダーの中のリーダーではあっても、真のリーダーシップを発揮することは、かなり難しいことであると思います。そのことは、ロータリアンについても全く同じであります。

ところで、今、世の中には、リーダーについて説いている本は沢山ありますが、その殆どのものは、昨今の効率本位の世相を反映して、どのようにしてリーダーになるか、とか、プレゼンテーションの力を磨くにはどうすればよいか、とか、ディスカッションの力をつける方法はどうか、とかのような技術論、謂わば、ハウツーものばかり

りであります。

しかし、ロータリーが求めているリーダーの中のリーダーとは、そのような技術論を訊いているのではなく、リーダーとは本来如何なるものなのか、と謂うこと、謂わば、「リーダー哲学」とも謂うべきリーダーの心を訊いているのであります。

これを簡単に謂えば、どんな小さな組織であっても、人々から尊敬されている人、慕われている人とはどのような人なのか、ということでもあります。

そこで、今日は少し視点を変えて、事例研究 case study の形式で、従来とは全く違った切り口から原理分析を試みたいと思うのであります。謂わば、リーダーの中の真のリーダーとも謂うべき人達の生き様を紹介しながら、少しでもその人達の境地に近づけるように、その生き様から某かのものを学んでいただければ結構かと思うわけであります。詰まり、従来のは、原理を説くことから入りましたが、今日は事実を説くことから入るわけであります。

そこで先ず、人はこの世に生を受け、やがてこの世を去る、その時に到るまで、人生には沢山の出会いがあります。その沢山の出会いの中で、自分の人生を変えるような話を聞くことがあります。それを聞き逃さないことでもあります。したがって、先ず、人の話を謙虚に聞く、ということが第一肝要のことでもあります。

さて、皆さん御承知のとおり、「初心忘るべからず」という言葉があります。これは、世阿弥が1424年に書いた能楽の論考「花鏡」の中にある言葉であります。これは、世阿弥が40歳過ぎから62歳までの経験を書き留めた芸術論であります。その「花鏡」には、「当流に万能一徳の一句

あり。初心不可忘」と出ています。これは、能楽習練の心構えを説いたものであります。最初の決意を忘れるな、ということばかりでなく、凡そ藝道は、生涯に亘る修業であり、一段進めばまた一段、その段階ごとに原点に立ち帰って、心緩めず精進怠ることなかれ、という戒めなのであります。

この戒めは、学問に志す者にも事業に携わる者にも、或いは夫婦関係にも通ずる教えでありますので、一般に広く行われて、事あるごとに屢々引用される言葉であります。したがって、「初心忘るべからず」この言葉は、どのような人であっても、終生守るべき鉄則なのであります。

ただ、現代の科学技術の進歩は著しいものがあります。したがって、世の中の諸々の現象は、日々に新たに、日にまた新たに变化して行き一瞬も止まることはありません。したがって、時代の変化には直ちに即応しなければなりません。

しかし、世の中には時代の変化に即応して変えてゆくべきものと、如何なる時代にあっても変えてはならないもの、とがあります。したがって、時代の変化に即応したものは、先んじて取り入れなければなりません。その変化の速度が速ければ早いほど一層心して、変えてはならないものは一体何か、ということを経日に自問自答して見る必要があるのであります。

このことは、ロータリーの世界においても同じであります。科学技術は日進月歩でありますから、昔あった職業、例えば、タバコの煙管を修理するラオ屋という職業がなくなりましたが、新しくIT関係の職業が現れるように、私達の目に見えている現象の世界は、日々に新たに日にまた新たに変わっていきます。したがって、この変化

には直ちに即応しなければ時代に遅れてしまいます。

しかし、本来、職業というものは如何にあるべきか、とか、職業倫理という本質的なものは、ロータリーの核にあるものがありますから、如何なる時代にあっても変わってはならないのであります。詰まり、世の中の目に見えている現象に惑わされず、常に本質を見抜くことが大切なのであります。このことを忘れて目先の利害得失に心を奪われますと、あっという間に転落することは、幾多の先例から明らかであります。したがって、『初心忘るべからず』ということは、やはり永遠の真理なのであります。

したがって、私達は、この言葉を毎朝反芻して、これを日常生活の信条として、道を誤らないように心がけなければならないと思うのであります。

そこで、この言葉を肝に銘じて厳しい実業の世界を生き抜いて来られた人の一人に、8年前の2008年秋に亡くなられた東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーがおられます。佐藤さんは、私が真のリーダーとして尊敬している人の一人でありまして、私が27年前にガバナーにノミネートされて以来、本当に親しくお付き合いをいただき、何かにつけて懇切丁寧に御指導をいただいた人であります。

就中、職業の倫理については、実に貴重な御意見を数々いただきました。そこで、今日は、佐藤さんの追憶を籠めて、先ず、佐藤さんからお聞きした事例を挙げながら、また、私自身の体験も交えながら事例研究 case study の形で話に入って行きたいと思うのであります

さて、佐藤さんは、東京は千住の一隅にあった一介の町工場千住金属工業を一代に

して世界的な企業に育て上げたオーナー経営者でありまして、私がリーダーの中の真のリーダーとして心から尊敬している人です。したがって、その成功に裏付けられたリーダーシップは、余人の追随を許さぬ素晴らしいものであります。

そこで、今日は、そのリーダーシップの一端を紹介しながら話を進めて行きたいと思うのであります。

先ず、リーダーにとって第一に重要なことは何か。それは、自分が関わっている組織の目的・理念を策定することです。例えば、会社であれば経営の理念、学校であれば教育の理念、ロータリークラブであればロータリーの目的など様々であります。そして、どんなに小さな組織であっても、組織の目的・理念がはっきりしていなければならない。

千住金属工業の経営理念には、佐藤さんの経営者としての基本的な考え方が見事に集約されているのであります。即ち、佐藤さんは、今から56年前の1960年に社長に就任したとき、自ら宣言した「経営理念」として「会社は、人間完成の道場である」と謳っています。これは、ロータリーの創始者米山梅吉先生が「ロータリーの例会は、人生の道場である」と喝破された境地と見事に合致するのであります。

この経営理念が示すように、佐藤さんは、真に理想主義者であり、しかも、その実践者でありました。その結果、1960年、社長就任当時は未だ売上高10億円にも満たない中小企業であった千住金属工業を47年後の2007年度期末には、売上高579億円の世界的企業に育て上げたのであります。

その成功の物語に一貫して流れる佐藤さ

んの経営の理念は、ロータリーの職業奉仕の哲学でありました。したがって、それを語るには、先ず、企業の中核である佐藤さんの「経営理念」を見なければなりません。これは、ロータリーの目的と同じく、佐藤さんの経営者としての基本的な考え方が見事に集約されているからであります。

佐藤さんは、この経営理念の集約として、どういうことを謂っているかと言いますと、「私は最大の会社となることを望まず、最良の会社となることを祈りにも似た心をもって切望する」と謂っておられます。ここは大事なところであります。

では、最良の会社とは何を意味するのか。その中身は一体何か。

私の解釈は、それは最良の社員であり、最良の役員であり、最良の製品であり、そして最良の顧客であります。これはロータリーの職業奉仕の根底に流れる質の探求の思想なのであります。

そこで、この経営の理念が具体的にどのような形で実現されているのか、ということについては、到底短い時間に語り尽くすことは出来ません。そこで、今日は、そのうちの職業倫理に関する若干のことだけを申し述べたいと思います。

佐藤さんは、「会社は誰のものか」という問題について、自ら宣言した経営理念の冒頭において、「会社は、社員共同の生活の源泉であり、社会は、会社が有用な製品を供給することを期待している。」と謂って、その故に、会社は第一にそこで働く社員のものであり、その会社の製品を利用する顧客のものであると考えているのであります。ここも大事なところであります。

そこで、このことについて佐藤さんの基本的な考え方を如実に示す事例を一つ紹介

しておきます。

佐藤さんは、約15年前、自ら筆頭株主として保有する全株式613,000株を全て従業員持株会に贈与されました。そして、次のコメントを出しておられます。

「千住金属工業がハンダ業界で世界一の生産量を誇る会社に成長したことは、社員の永年の努力の賜であり、感謝している。そこで、会社の発展に貢献した社員に、持株を無償で贈与して、その労に報いることにした。これから後も末永く社員一同、心一つにして私が唱導する『経営の理念』を堅持し、持株会を通じて会社経営に参画する意欲を強く持ち、物心両面での成長と千住金属の発展に更なる努力をして頂きたい」と謂うのであります。

社員が発憤しない筈はないのであります。それと同時に、リーダーにとって大事なことは、社員の役員に対する信頼も揺るぎないものとなるのであります。

この株式譲渡によって、持株会は千住金属工業の最大株主となりました。將に社員の利益と株主の利益が一致したわけであります。これは、職業奉仕の極致にある考え方であります。

このような考え方は、株主の利益を第一に考え、且つ、莫大な役員報酬を受けるアメリカ型資本主義とは正反対の極に立つものであります。恐らく殆どのアメリカの経営者が想像することも出来ないことであろうかと思うのであります。

要するに、「会社は誰のものか」という問題について、佐藤さんは、結論として「会社は社員のためにある」と考えているのわけあります。そして、このことについて次のようなコメントを残しておられます。「私が持株会に株式を譲ったのは、会社という

ものは社員のためにあるからです。株が資産価値を持ったのは社員の努力によるものです。だから社員に返すのです。墓場まで持って行けないからというような安易な発想ではなく、『経営の理念』で唱えた私の美学を貫いたのです」と謂うのであります。経営の理念というものが、如何に重要なものか、と云うことが判ります。

云うまでもありませんが、真のリーダーであるためには、自分の全株式を譲渡しなければならない、などと云っているわけではありません。真のリーダーの中には、佐藤さんのような人もいるということであり、このようなことも貴いことであることを理解して頂きたい、と思うのであります。

ところで、自分の全持株を社員に贈与して自分の美学を貫いた佐藤さん、当然のことながら自分の配当収入がなくなりました。そこで、「食うだけの給料は支払ってくれ」と会社に頼んであったそうであります。

因みに、会長である佐藤さんの給料は社長と同額であります。実は賞与は一銭も受け取っていないのであります。その理由は一体何か。「役員賞与を最後に査定するのは私ですからね。お手盛りになるのが嫌だから、賞与は貰わないようにしています。その結果、私の年俸が役員の中では一番少ないんですよ。」と言って微笑まれるのであります。

なお、序でながら、佐藤さんは、千住金属工業の株式を公開・上場するつもりは全くなかったのであります。それは一体何故か。

株式を公開・上場して他人の資本が入ると、経営の自由度が失われる、と謂うのであります。これは、期間損益と減価償却で十分なキャッシュフローを確保して適切に投資が出来ているのであれば、敢え

て資金を集める必要はない、という考え方です。この考え方が、経営理念の集約として「私は最大の会社となることを望まず、最良の会社となることを祈りにも似た心をもって切望する」ということに繋がるのであります。

昨今、たとえ資金調達ニーズがなくても、株式を上場させて創業者利益を得ようとする経営者もある中で、このような合理的な考え方が出来るのは誠に素晴らしいことであると思うのであります。

このように、自分のことはさて置いて、ひたすら企業の安定、発展を考える経営者が、今の経済界に果たして何人居るでしょうか。このような生真面目なところは、佐藤さんが自らエリートをもって任ずる気概なのであろうかと思えます。それは将に *Noblesse oblige* の思想に通ずるものであると思うのであります。

*Noblesse oblige* というのは、御存知のように、イギリスの貴族階級の根本精神を表した言葉でありまして、自分達の持っている貴族としての特権、財産などを国民や国家のために役立てる義務と責任があるということの意味する言葉であります。現に、あの第二次世界大戦におけるイギリスの将校達の戦死者の中には、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の出身者が圧倒的に多かったと謂われています。彼らは、自ら国民の先頭に立って国のために戦死したのであります。

このように、*Noblesse oblige* という言葉の根底に流れる思想は、誠に崇高なものなのであります。この故に、イギリスの貴族は、素晴らしいリーダーシップを発揮しているのであります。

元来、この世の中には、一方に、

Noblesse oblige のような高潔な思想があり、他方には、株主原理主義のような株主利益優先の利己的な思想もあり、その他千差万別な思想があります。その中であって、ロータリーの思想は、利己と利他との調和を目的とする人生の哲学であるという思想であります。

ただ、利己と利他との調和、とは謂いますが、それは具体的に謂えば、どういうことなのか。例えば、百円のを仕入れてきて、これを百万円で売ったとすれば、そのようにして得た利益をロータリー的な意味での儲け、利益と呼ぶでしょうか。これは、明らかに暴利であります。したがって、商人も儲けなければ、幸せな人生を築くことは出来ませんが、それには限度があって、適正な利潤を超えて儲けてはなりません。したがって、商人は商人で儲かって幸せになるが、顧客もその商品を買って幸せになるという両者の調和点が何処かになければなりません。これを抽象的な表現で表すと『利己と利他との調和』ということになるのであります。

ロータリーの奉仕というのは、実は、このことを謂うのであります。商人は代金(儲け)を受け取って幸せになる。顧客も商品を受け取って幸せになる。双方のバランスをとる一点というものが必ずある筈であります。いつも、その調和を求めていくと、一つの取引を通じて、目に見える『商品と金銭の交換』だけでなく、目に見えない『満足と感謝の交換』つまり、お互いに小さな信頼関係を交換するようになるのであります。これが『利己と利他との調和』であるというのであります。

ここまでの話は、よく解ります。しかし、もう一歩突っ込んで考えて見ますと、利己

とは自分を利すること、即ち、これは自分のためのもの、一方、利他とは、他人を利すること、即ち、これは他人のためのもの、世のため人のためのものであります。このように、エネルギーの方向が全く正反対の利己と利他を果たして調和させることが出来るのか。よく考えて見ると、利己と利他とは調和できないものであります。実は、利己と利他とが調和できるのは、仏教で謂えば菩薩の世界であります。したがって、私達凡人には調和できないのであります。

では、どうすればよいのか。

菩薩の世界に少しでも近づけるように努力することです。ロータリアンは、毎週一回のクラブ例会において、自分の心を磨く自己研鑽、そして、皆で心を磨き合う切磋琢磨、そして、少しでも利己と利他とが調和出来るようになることを念願しながら努力するのであります。このように致しまして、利己と利他との調和というのは、実現の世界ではなく、念願の世界なのであります。菩薩の境地に少しでも近づけるように念願しながら努力する世界なのであります。

したがって、自分のことを考える利己も大事、世のため人のためのことを考える利他也大事、どちらも大事なのであります。したがって、利己だけを考えると、利他を忘れると、菩薩の世界から遠ざかり、道を誤ることになります。

R Y L A の学友の皆さんは、毎週一回の例会というものがありませんが、総会を始め仲間が出会うあらゆる機会を捉えて、そして、ロータリアンと出会うあらゆる機会を捉えて、利己と利他との調和、ということに心を留めて頂ければよいと思います。

一寸、話が堅苦しくなりましたので、ここで話の視点を変えます。それは、佐藤さ



んのリーダーとしての心の根源にある話であります。

先ず、佐藤さんの或る文章を紹介します。

「うぶな少年期に出合った言葉というのは、時としてその人の生涯に決定的な影響を及ぼす。それは、中学初年の頃であった。少年向けの雑誌の中で、「人生の目的は何か。それは、大臣になることでも、大将になることでもない。朝目が覚めた時、ああ今日も生きている……と胸を張って生きていることの喜びに感激し感謝する。そういう生き方をすることだ」という内容の文章を見つけて、目の覚める思いがした。

その後、学校の教科書を読んでも、又、課外の読物をして、常に人間の生き方ということを中心にして考え、これを理解するようになったのだが、それは格別意識してそうした、というようなものではなく、全く無意識の中にそういう方向へ導かれて行ったのである。

考えてみれば、それはまことに不思議な啓示だった。後年、難しい哲学書や宗教書を読んでも、また詩歌小説に楽しみを求めても、こういう初心の感銘が胸の奥底にあると、おのずからその理解鑑賞の密度が違って来る。七十年を顧みて、私の生涯は、極めて平凡なこの真理に貫かれている、と言っても過言ではない。」

というのであります。実は私には、直ぐには実感で出来なかつたのでありますが、色々と示唆に富んだ言葉であります。話は続きます。「さて、人並みに学業を終え、人並みに勤め人になった私だが、思いがけぬ太平洋戦争、そして敗戦、という変革に遭遇して、小さな町工場を主宰することになった。

従業員二十人、資本金六万円……要する

に、誰もがただ食うために働く、というだけに過ぎなかつたとき、私は、当時としては全く型破りのことを、先ずやった。それは、ブルーカラーとホワイトカラーの区別を取り払って、全員月給制にする、そして、出勤簿も廃止する、というのである。

それは、多くの人の意表をつくものだったが、私の生き方からすればごく自然のことであって、別して難しい経営論など学んでしたことではなかつた。」

というのであります。ここに、リーダーとしての片鱗を看取ることが出来るのでありますが、私が、この人は本当に凄いな、と思ったのは次の言葉であります。「それから、1960年（昭和35年）、正式に社長に就任した時、即ちその年の7月から毎月、その月生まれの社員に、特別にデザインした銀のスプーンを、その都度、心をこめて自ら執筆したお祝いの言葉に添えて贈ることを始めた。

スプーンの方は、数年分作りためておけばいいが、メッセージは、毎月、その時その時の話題を捉えて書かねばならないので大変である。その上、その頃、私も、ますます忙しくなって来て、海外へもたびたび出かけるようになったが、時に外国から航空便で原稿を届けることもあった。そうして1978年（昭和53年）、社長職を退く最後の月まで、正味18年間これが続いたのである。」

というのであります。このようなことは私にはとても出来ないことではありますが、少しでもこの心の境地に近づきたいとは思っています。しかし、難しいことでもあります。

ここに佐藤さんが、部下の誕生日に愛情を込めて、繰り返し繰り返し述べられている言葉は、人は如何にあるべきか、如何に

生きるか、という生涯をかけた永遠の間であります。そしてそれが『最大となることを望まず、最良となることを望む』という経営理念に繋がるのであります。

佐藤さんは、部下に対し、「まことにいのちは珠よ！珠のいのちをしかと抱いて、あなたも私も、天与の命を真実一路に生きようではないか。」

という言葉で結んでおられます。この言葉は、佐藤さんが昭和天皇の大喪の日に出版された「いのちのことがい」（言祝ひ）という私製本の冒頭の文章であります。

さて、この話から学ぶべきことは何か。

実は、この話とか、この話が書かれている本などは、将に、現象に過ぎません。この話の奥にある佐藤さんの心、リーダーとしての心をこそ学ぶべきであります。そのことが、現象に囚われずに本質を見ることになるのであります。

リーダーが部下を思う話はよく聞くとこゝろであります。佐藤さんのように、その心を具体的な行動として示した人は少ないと思います。しかも、そのことを18年間も続けたということは、部下を思う愛情が半端でないことを示しています。将に余人の追隨を許さぬところであろうかと思うのであります。

ただ、皆さんが、自分には、こんなことは出来ないと言めることはありません。私も、こんなことは到底出来ません。要は、佐藤さんのようなリーダーも居たということに心を留めて置いて頂きたいのであります。そして、出来ることなら少しでもその境地に近づきたいと思う心を持って頂きたいのであります。

さて、そこで、佐藤さんのリーダーシップの中核にある話を致します。

佐藤さんは、企業の社会的責任という謂うことを早くから自覚されておられました。それは、千住金属工業の「経営理念」に所謂「公器としての使命を果たす」という言葉に表れています。したがって、スプリンクラーの製造を始めたことも、その一つの現れでありました。

実は、佐藤さんが昭和36年にスプリンクラーを開発するきっかけとなったのは、仙台の旧制第二高等学校時代の先輩から聞いた話でありました。それは、『これから消防法が改正されて、3年後には、一定の容積のビルや工場には、全部スプリンクラーを付けなければならなくなる。このことは高層ビルの火災を考えれば当然のことである。

ところが、日本の消火装置メーカー、消火器メーカーの何処に頼んでも誰も作ることが出来ない。調べてみると、世界中全部、アメリカが独占している。アメリカには消火器の会社が沢山あって、自動消火装置100年の歴史がある。

ところが、100年経っているから特許権は切れている。機械を分解すればその原理構造が判るのだが、それでも誰も出来ない。貴方のところでやらないか』

と謂うのであります。そこで佐藤さんは、この情報に飛びついたわけでありました。ただ、佐藤さんは、この仕事が儲かるからやろう決断したわけではありません。この仕事が社会的に重要な仕事であり、しかも、他社が何処も開発できていないからこそこの仕事をやろうと決断されたのであります。

しかも、儲かることなら何にでも手を出す多角経営ではなく、これは佐藤さんの会社のハンダ製造業と根本のところ繋がつているからやる価値があると判断されたの

であります。

元来、スプリンクラーヘッドというものは、その品質が悪くて、いざという時に機能しなければ人命にかかわるものでありますから、その社会的意義は大変大きいのであります。しかも、千住金属工業の基本事業であるハンダの製造と関連があります。そして、国内では未だ何処も開発に成功していなかったのであります。だからこそ佐藤さんはこの事業に着手したわけであります。

ただ、千住金属工業のハンダの技術だけでは、スプリンクラーヘッドは開発できません。そこで、佐藤さんは、機械工学の専門家である高橋栄吉先生を三顧の礼をもって迎え入れられたのであります。そして、高橋先生を中心とした開発グループがスプリンクラーヘッドの国産化に成功したのであります。

要するに、佐藤さんは、技術提携などという人頼みの道を選ばず、独力で開発に成功し、国産認定第1号として登録されたのであります。

勿論、佐藤さん自身には技術能力があるわけではなく、当然そこに立派な適材を得ることが出来たから成功したのであります。

しかし、問題は、それから先であります。発明や特許などというものは、謂わば【コロンブスの卵】でありまして、出来てしまうと、すぐその原理が判りますから、続々と後を追う者が出てきます。佐藤さんは、「他人の開発したものはやらない」という主義であります。日本人の多くはそうではありません。人真似…横並び過当競争が習性であります。

例えば、都会では、美味しいラーメン屋が店を開くと、いつの間にかその周囲にラーメン屋が沢山出来てラーメン横町が出

来上がります。そして、中には繁盛しない店も出来ることになるのであります。

スプリンクラーの場合は、すぐに或る給排水配管工事業者が参入してきました。佐藤さんのところのスプリンクラーは、撒水式自動消火装置でありますから、当然その施行は、水道関係の配管業者がすることになります。

ところで、このスプリンクラーの機能的な生命は一体何処にあるのか、というと、それは天井に取り付けられたヘッドにあります。しかし、ヘッド単体の値段は、安いものでありますから、工事費全体の中に占める比率としては、真に微々たるものであります。したがって、ヘッドだけを造って売っても、余程沢山造らなければ、商売にはなりません。

そこで、設備全体の販売と工事請負事業で儲ける会社が沢山出て来たわけあります。これでは千住金属工業は、とても、まともな勝負は出来ません。その結果、千住金属の仕事のシェアが狭くなり、赤字を計上するようになりました。

しかも、万一、スプリンクラーヘッドが正常に機能しないと計り知れない損害賠償責任が発生します。したがって、千住金属工業の社内には、この危険を知らながら敢えてスプリンクラーの製造を続けるのであれば、給排水工事も合わせて事業を営むか、或いは、当時の土木建築業界の慣例によって、裏金、即ち、賄賂を使うべきだという声がありました。しかし、佐藤さんはこれを拒否したのであります。

これは、事業経営者にとって肝腎要のところであります。

実は、工業製品というものは、日進月歩で次々に新しいものが出てきますから、常

に時代を先取りして新しいものに挑戦しなければなりません。そこに多角経営の必要性があるのであります。しかし、一口に多角化と言っても、それはあくまでも自社の主力事業と技術的に繋がっているものでなければなりません。

実は、この自動消火装置について、消防庁は、当初、消火という用途にしか目が届きませんでしたので、自分達の指導監督下にある消火器会社にだけ開発を督促していたのであります。

しかし、火を消すという機能は同じでも、スプリンクラーは一般の消火器とは、その機材の構造も作動原理も全く違うものなのであります。したがって、何処がやっても満足なものは出来なかったのであります。

一方、千住金属工業は、中間資材として非鉄金属とりわけ錫鉛の合金製造業でありますから、従来からある一般の消火用機器などとは、一見如何にも無縁に思われがちであります。

しかし、実は、撒水式スプリンクラーヘッドの場合、これを正確に作動させる生命線になっているのが、永年、千住金属工業が手がけている低融点合金でありますから、この点で何処よりも密接な関係があったのであります。したがって、千住金属工業には基本的な技術の蓄積があります。したがって、傍目には冒険のように見えても、佐藤さんは敢えてこれに挑戦したのであります。

また、千住金属工業は、土木建築業界とは無縁であります。まして配管工事などという技術もなければ職人もいません。

更に、悪いことに、この業界は最も闇の金の動くところでありまして。したがって、佐藤さんは「絶対に工事には手を出さない、ヘッドやバルブという機材の製作一筋に技

術を結集する」と宣言したのであります。

そうすると、今度は、千住金属工業の営業担当者は、それならば、せめて多少の裏金、即ち、賄賂を使うことを認めて欲しい、と言ってきました。然し、佐藤さんはそれも断りました。卑劣な商売はしたくなかったからであります。

しかし、そのような潔癖を押し通す限り、この部門は赤字であります。それどころか、そこまで苦勞しながら、万一、暴発事故でも起こしたらどうなるか、或いは、いざ火事だ、というときにスプリンクラーが正確に作動しなかったらどうなるか、それこそ会社が潰れるほどの損害賠償を請求されます。

そこで、遂には、会社の役員達が挙げて、佐藤さんに対してこの事業からの中止撤退の要請をするようになりました。

しかし、佐藤さんには、必ずものになるという成算がありましたから、これも押し切って「赤字操業」を続けさせたのであります。

しかし、遂には会社役員のみならず、会社を挙げてスプリンクラー事業からの撤退を要求するようになりました。しかし、佐藤さんは断乎として拒否し続けたのであります。流石は創業者であります。大企業出身のサラリーマン社長とは違うのであります。これをこそリーダーの中の真のリーダーというべきであります。

このことについて後日、佐藤さんは、「私は、皆が反対することを無理矢理押し切ったことは殆どない。しかし、スプリンクラーについてだけは譲れなかった。これは、生涯でただ一度、将に乾坤一擲の勝負だった」と言っておられました。

凄い話であります。リーダーたるものが先を見ることが如何に大事か、佐藤さんは、スプリンクラーの未来を世界的視野で見て

いたのであります。

佐藤さんの計算では、ハンダ事業の利益によって、スプリンクラー事業の赤字はカバーできていたのであるから、この赤字は、事業育成のためのむしろ健全な赤字であり、しかも、この赤字は、税務処理上は損金で落とせるという判断をしておられたのであります。

一方、不当な安売りをしている業者には、しっかりした技術の裏付けがありません。水道の配管工事とスプリンクラーヘッドという精密機器の製作とでは、天と地の差がある異質の世界であります。これは、いずれ破綻するだろうと思っていると、案の定破綻しました。

このようにして、佐藤さんは、無用の過当競争を避け、徹底的に品質管理と設備の自動化を進めて、他社ブランドの製品も引き受けるようにしたのであります。

要するに、佐藤さんは、営業の駆け引きで勝負するのではなく、技術力で勝負する、という姿勢を貫いたままであります。生産会社においては、これが正道なのであります。

結局、品質を重視する千住金属工業が殆どのシェアを独占することになったのであります。したがって、もし、佐藤さんが、社内の反対の声を聞き入れて、千住金属がスプリンクラー事業から撤退していたら、我が国におけるスプリンクラーの普及が遅れてしまったと思うのであります。この意味において佐藤さんの果たした社会的責任は非常に大きいと謂わなければならないのであります。加えて、スプリンクラーの品質の向上に努め、ひたすら良質なものにこだわり続ける職業倫理に徹した佐藤さんの信念には驚嘆するほかはないと思うのであります。これこそ将にリーダーの中の真の

リーダーというべきであります。

さて、佐藤さんは、世界中で11の子会社を作られましたが、スプリンクラーは現在、月に20万個製造しています。全て自動生産体制で、小さなビスから部品から全部自動的に作って、自動的にコンベアの上に乗って、自動的に組み立てるのであります。そして、最後に個別試験もします。それも全て自動的に試験をします。不良品は減多に出ませんが、もし出れば、機械が自動的に勿ねてくれます。

そして、24時間生産でありますから、従業員が居なくても、昼飯を食っていても工場は動いています。したがって、月産20万個も製造出来るわけであります。

現在、恐らく、日本の何処へ行っても、どのホテルへ行っても、80%は千住金属工業の製品であります。それは一体何故か、と言いますと、他社ブランドも引き受けているからであります。利益を自社だけで独占しようとは思わないのであります。製品は特許で押さえていますが、自分だけで利益を独占して他社を潰そうとは思わないのであります。製品に他社の名前を入れてやるという方式であります。

このように、リーダーの中のリーダーであるためには。会社経営についても、社会生活においても、自分のことだけを考えるのではなく、何時も、人のことを考える、人のことを思いやる心を忘れてはならないと思います。

今まで、申し述べたことを一言で纏めますと、リーダーは、情理兼ね備えた人でなければならないと謂うことになろうかと思えます。

さて、ここで今まで申し上げてきたことの中から、重要な論点を二三指摘しておき

ます。

先ず第1の論点は、先程申し上げましたように、佐藤さんが「絶対に工事には手を出さない、ヘッドやバルブという機材の製作一筋に技術を結集する」と宣言したのに対して、設備全体の販売と工事請負事業で儲けようとする会社が出てきたとき、千住金属はまともな勝負が出来なくなり赤字を計上するようになりました。

そこで、会社の営業担当者は、会社が生き延びるために、せめて多少の裏金を使うことを認めて欲しい、と言って来たとき、佐藤さんはそれも断りました。

しかし、佐藤さんがそのような潔癖を押し通す限り、この部門は赤字になるどころか、そこまで苦勞しながら、万一、暴発事故でも起こしたらどうなるか、或いは、いざ火事だ、というときにスプリンクラーが正確に作動しなかったらどうなるか、それこそ会社が潰れるほどの損害賠償を請求されることになります。にも拘わらず、佐藤さんは、裏金、詰まり賄賂を使うことを認めなかった。それは一体何故か。

こここのところは職業倫理の問題として、非常に重要なところでもあります。

昨今の我が国の職業社会の倫理の退廃振りは、真に眼に余るものがありますが、実は、裏金即ち、賄賂を使うことは、何も今にはじまったことではなく、戦前から行われていたことであります。

実は、この話の根底には、職業倫理の中核にある賄賂禁止の思想があります。

親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起ります。これは、自分だけが良い仕事にありつこうと

いうエゴイズムの心に基づくものでありますから、もとより同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。

そこで、ロータリーは、古来、倫理運動の視点から、賄賂の授受を厳に戒めているのであり、これは職業倫理の核にある大きな柱であります。

昭和六年の日本の2代目のガバナー井坂孝ガバナーは、国際ロータリー第70地区のガバナーに就任して、全国のロータリアンが拳々服膺すべき職業倫理の三ヶ条を提唱しました。即ち、第一に曰ク、ロータリアンたる者は約束を守るべし。第二に曰ク、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ。第三に曰ク、ロータリアンたる者は徒に慈善事業に憂き身をやつすことなかれ。

この三ヶ条の中で、職業倫理との関係で重要なのは、第二の、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ、であります。これは、言うまでもなく、賄賂の横行しない健全な取引社会と公正な自由競争社会の実現を説くものであります。それは同時に、賄賂の授受が結果的には当事者の信用を失墜し、企業の発展を阻害することを説いているのであります。

実は、私は、今から11年前の2005年に東京の2580地区の地区大会に、国際ロータリー会長代理として出席しましたが、その時、職業倫理について賄賂禁止の話をしました。

ご存知のように、職業社会には、昔から賄賂を使わなければ生きて行けない業界あります。しかし、ロータリーは厳然として賄賂を禁止しています。

すると、賄賂を使わなければ生きて行けない業界にいるロータリアンは、生きてい

くことが出来ません。では、どうすればいいのか。

賄賂を使わなければ生きて行けない業界で、自分はロータリアンであるから賄賂は使わない、と言って、自分の会社を倒産させてしまっただけは何にもなりません。

そこで、私は、ロータリーは、不可能を強いるものではないのだから、そのような業界に居るロータリアンは、賄賂を使えばよろしい。但し、堂々と使うのではなく、賄賂を使わなければ生きて行けないこの業界は、改革しなければならない、と思い定めて、そのための努力をして、しかも、自分の世代でそれが成し遂げられなければ、孫子の代まで申し送っていくという信念を持って、やむを得ず使う賄賂でなければならない、という趣旨の話をしました。

会場の雰囲気からして、この話は、一見パンチが効いて居たようでありました。ところが、夜の晩餐会の席で佐藤さんから、『深川さん、今日の賄賂の話は頂けないよ。私は、絶対に賄賂を使いませんよ』と諭されました。

私は、脳天に鉄槌を食らったようなショックを受けました。後で佐藤さんから御自分の体験談を伺い、身に沁みて職業倫理の厳しさを思い知った次第であります。

要するに、リーダーというものは、組織の大小に関わらず、大は国家から、小は村の青年団、小学校、果ては家庭に至るまで、倫理というものを厳正に守るべきであります。国ならば政治倫理、会社ならば企業倫理、地域社会ならば社会倫理、その他あらゆる社会関係において倫理を守ることが、この世を生きていく上で何よりも大切なことかと思うのであります。

このことは、リーダーの中のリーダーに

なるための基本前提であります。

賄賂については、企業の社会的責任とも関連がありますが、長くなりますので賄賂の話はこれで終わっておきます。

第2の論点は、佐藤さんが、「絶対に工事には手を出さない、ヘッドやバルブという機材の製作一筋に技術を結集する」と宣言した結果、スプリンクラー部門が赤字を出し続けましたが、頑固に製造業の本来のあり方を貫いたことであります。

常識的には、スプリンクラー単体の値段は安いものでありますから、そんな利幅の少ないものだけを作って売ったとしても殆ど儲かりませんから、誰でも工事全体を請け負って、その工事代金で儲けようとしません。したがって、水道工事業者は、このやり方で儲けようとしたわけでありました。これは、将に目に見えている目前の利益という現象にとらわれた考え方でありました。

ところが、佐藤さんは、未来の高層ビル時代を見詰め、世界的視野でスプリンクラーの未来を見通していたのであります。したがって、高層ビル時代の火災その他の防災対策は如何にあるべきか、更に、全ての建築物における消火設備は如何にあるべきか、という本質を見抜いていたのであります。したがって、どんなに赤字経営が続いても、頑固に初心を貫いたわけでありました。将に、現象にとらわれずに、本質を見抜いていたのであります。

このようなことは、今日のサラリーマン出身の社長には、絶対に出来ないことではありますが、オーナー社長であっても、実行出来る人は少ないであろうと思います。何故か、と言いますと、色々な原因が考えられますが、一つの例をあげますと、上場会社の場合は、3ヶ月毎に決算期が来ます

から、決算期に利益が出て居なければ、会社役員は株主総会で退陣を求められる可能性があります。したがって、佐藤さんのように、決算期毎に赤字決算を続けることは出来ません。そこで、無理にでも利益を出そうとして不正経理をすることにもなるのであります。

ただ、佐藤さんは、先程申し上げましたように、株式の上場をしていませんから、他人の資本に拘束されずに自由な経営が出来たという事はあります。

しかし、だからといって、赤字経営を何年も続けることは、普通の人の出来ることではありません。したがって、佐藤さんのこの頑固さは、単なる頑迷固陋ではなく、現象に惑わされずに本質を見抜いた上での頑固さなのであります。リーダーの中のリーダーには、時としてこの頑固さが必要であります。

このことについて、佐藤さんの場合は、会社の内部からの圧力でありましたが、会社の外部からの圧力と闘い抜いた私の友人利倉洸一君の話を紹介しておきます。

彼は、私の旧制伊丹中学時代の友人でありまして、共に関西学院を出た親友であります。今、中学時代の同期生で現役で働いているのは、彼と私の二人だけであります。彼も父親の後を継いで中小企業の社長をしていますが、佐藤さんと同じく、株式の上場はしていません。

彼の経営哲学によれば、株式を上場することは、他人の金を借りることであり、他人の資本が入ってくる。その限りにおいて、会社は他人の会社であるから、自分の思うような経営が出来ない。したがって、自分の会社は、自分の金で出来ているから潰すことも自分で潰すことが出来る。しかし、

他人の金が入った会社は、他人の会社であるから、自分で潰すことが出来ない。しかも、自分の会社であっても、大きくなって自分の手に負えなくなったら社会に寄付する、というのであります。

これも、真のリーダーシップの一つのあり方であります。真のリーダーシップは、権力とか、財力とか、社会的地位とかには関係なく存在します。例え、大企業の社長であってもリーダーシップのない人は居ます。反面、社会的地位とか、財力がなくても真のリーダーシップを持ったリーダーは沢山居るのであります。組織の大小、軽重に関わらず居るのであります。

友人利倉洸一君は、社長就任当時、未だ弱冠27歳の若さでありました。当時は、未だ戦後の復興の途中で、会社経営も苦しく、労働運動華やかかなりし時代でありました。そのような時代に、彼は、激しい労働争議を闘い抜き、遂に、解決金なしで争議を解決した殆ど唯一の人であろうかと思えます。その一端を紹介しますと、

組合側は、上部団体始め他社の組合員も総動員して、約3000人が彼の会社に押し掛けましたが、彼は、180日間戦い続けて一步も譲らず、遂に、総評が折れて、彼は自分の主張を押し切ったのであります。結局、解決金を一銭も支払わないで、労働争議を解決したと謂います。恐らく戦後の労働運動史上殆ど例を見ないことであろうかと思うのであります。当時、彼は未だ27歳でありました。

元来、労働争議の解決金というのは、総評の役員報酬を始め、労働争議の費用も当然含まれています。したがって、争議が長引くと、組合員に動員をかけたための日当その他の費用が嵩むこととなります。そこで、総評



としても、これ以上長引かせたくないのので遂に諦めたというわけでありませう。

このようにして、彼は、会社を救うための強烈なリーダーシップによって長期の労働争議を勝ち抜くことが出来たわけでありませう。

実は、これを知った当時70歳位の或る経営者は、弱冠27歳の彼に三顧の礼をもって自社の経営の指導を乞うたと謂います。

ただ、このことだけを見ますと、彼は、経営者としては、頑固一徹で、ひたすら前進あるのみという印象を受けますが、しかし、やはり彼もリーダーの中のリーダーであります。企業経営について洩らした言葉を紹介しますと、「川では鮒になれ、湖では鯉になれ、海では鯨になれ。」と謂うのであります。

要するに、自分の身の丈に合った経営規模でやれ。と謂うのであります。そして、最大となることを望まず、継続できることを第一に考えよ、と言うのであります。

この言葉は、佐藤さんの「最大となることを望まず、最良となることを望む」という言葉と一脈相通ずるものがあります。

さて、最後に、第3の論点は、リーダーの中のリーダーとなるための素養として、「現象にとらわれずに本質を見る」と謂うことについて、もう少し、具体的に考えてみたいと思うのであります。

一般論として謂えば、科学技術の発達により、社会はめまぐるしく変化します。したがって、職業社会も同じく時代の変遷に従って変化します。嘗て存在した職業、例えば、タバコの煙管を修理するラオ屋さんという職業がなくなりましたが、一方、新しくIT関係の色々な職業が現れました。このような職業社会の変化と共に経済社会

の状況も日々に変化します。しかしこれらの変化は、全て「目に見えている世界」即ち、「現象の世界」であります。般若心経に所謂「色即是空」の「色」の世界であります。

私達は、この目に見える現象に惑わされずに常に物事の本質を見抜く目を持たなければならぬのであります。歌を二首、紹介します。

「骨隠す皮には誰も迷いけむ美人というも皮のわざなり」これは足利第六代将軍に仕えた文武両道の武士蜷川新左衛門の一首であります。これに唱和して一休禅師が次の歌を詠みました。

「皮にこそ男おんなのへだてあれ骨には変わるあとかたもなし」と。

男も女も、どんなに美しい人でも、その美しさの奥にあるものは、骸骨であります。美しい顔も、一皮むけば骨がある。骨こそが人間を人間たらしめている根源であります。人を焼いても骨は残ります。骨は人間の本質を意味します。したがって、「あの人は骨のある人だ。」という謂い方もあります。このようにして、人間の本体が解れば、人間が愛おしくなります。

美しい肌や美しい顔・姿は、目に見えている現象であって、それに惑わされず、人間の本体・本質を見るべきであります。

実は、昔、この一休禅師と蜷川新左衛門の歌を読んで思い出したことがあります。それは、何かのコントであったと思いますが、「美人に会えば、アメリカ人は、ふくよかな胸を想像する。フランス人は、美しい裸身を想像する」と云うのであります。そこで、私は、一休禅師らの歌を思い出したわけでありませう。

要するに、リーダーたる者は、常に物事の本質を見据えていることが大切である、

と同時に、いつも他者にたいする「思いやりの心」を忘れてはならないと思うのであります。

嘗て、レイモンド・チャンドラーは「人間は、遅しかなければ、生きて行けない。と同時に、優しくなければ、生きる資格がない。」と謂いました。

これを要するに、私達は常に、人を思いやる濡れた心をもって諸々の現象を見る、そして、冷静な乾いた目を以て本質を見抜かなければならないと思うのであります。濡れた心を以て乾いた目でものを観る、詰まり、『濡れた心で、乾いた目で。』と謂うことがリーダーにとって最も肝要なことであろうかと思うのであります。

最後に一言。花は散るから美しい、人も死ぬから尊いのであります。桜の花も、一年中、咲いていたら、良いとは言えません。桜の花は一週間ほどの命、それも、人に見て貰おうと思って咲いて居るわけではありません。精一杯咲いて散っていく。だからこそ、美しいのであります。

人も死ぬから尊いのであります。世間に認められても、認められなくてもよい、散っていくところに人の良さがあると思います。

名曲を聴けば余韻が残ります。何時までも余韻が残っていくように、私達の人生も、認められても、認められなくてもよい、精一杯生きていく、そのことが大切であります。

では、どのように生きていくのか、というと、全てのことに感謝して、お陰様で、という気持で生きていく。そうすると死んでも余韻が残っていくものであります。肌触りのよい人は、死んでからも良い人でしたね、もう一寸長生きして欲しかったなあ、と余韻が残ります。今井鎮雄先生の余韻は、今も私の心に残っています。

それは、ローマは一日にして成らず、ローマが栄えたのも一朝一夕になったものではなく、毎日の積み重ねが、死という緞帳が下りた時に、後の人にどのようなものを遺したか、リーダーの中のリーダーは、余韻を残して死にたいものであります。ご静聴有難うございました。

## あ と が き

竹中会員の発案から始まりましたロータリーの3分情報「純ちゃんのコーナー」も15年の年月を重ねてきました。

今回、Part XVにおきましては、Part XIVから引き続きの「R Y L A・その理論と実践」に始まり、「日本ロータリーの昔話」と解説していただきました。また、巻末には「今井先生を偲ぶ」、及びR Y L A学友会卓話として、「リーダーの中のリーダーとは」の内容で特別にお話いただきました講話を掲載いたしました。

ロータリーの基本を学ぶためには、「ロータリーの歴史、ロータリーの思想、ロータリーの組織、そして、ロータリーの実践という順序を踏んで、体系的に学ぶことが必要である」と深川先生は説かれています。正しいロータリー情報を学び、伊丹ロータリークラブらしいロータリー活動を実践する。その源が「純ちゃんのコーナー」であると思います。

最後になりましたが、深川純一会員の献身的なご尽力に、心より敬意を申し上げますとともに、福武哲夫前会長、田中賢一前幹事をはじめ全会員の皆様、そして事務局のご協力に深謝いたします。

2016年10月 雑誌・ロータリー情報委員会  
委員長 岩井 秀樹

